

校定
平家物語百二十句本

高
橋
貞
一
識

平家卷第十

三四〇

第九十一句 平家一もんくびわたさるゝ事……………三四二

けいしやうのくびおほちをわたすや

いなやの事

さいどう五さいどう六くび共見たて

まつる事

三ゐの中じやうのふみ

第九十二句 やしまゐんぜん……………三四六

しげひらこうちをわたす事

三じゆのじんぎしよまうの事

ゐんぜん

平家ゐんぜんの御返事

第九十三句 しげひらじゆかい……………三五一

しげひらしゆつけゆるされざる事

ずゞりまつかげほうねんしやう人に

たてまつらるゝ事

しげひらおほうち女ばうたまづさ

しげひらとねうばうとさんくはいの事

第九十四句 しげひらあづまくだり……………三五六

いけだのしゆくゆやあるじうた

よりともとしげひらとたいめん

せんじゆのまへゆどのへまいる事

せんじゆしげひらゆうゑんの事

第九十五句 よこぶえ……………三六三

これもりやしまいでらるゝ事

たきぐちほつしん

よこぶえしきよ

たきぐちかうやのろうきよ

第九十六句 かうやのまき……………三六七

これもりかうやさんけい

たきぐちにうだうたいめんの事

ゑんぎのみかどぎよいをかうやに

をくらるゝ事

大しみかどの御返事

第九十七句 これもししゆつけ……………三七〇

第百句 ふちと……………三八五

しげかげいしどう丸しゆつけ

げんじむろ山のちん

これもりたけざとにゆいごんの事

平家こじまのちん

これもりゆあさにゆきあはるゝ事

さゝきの三郎せんちんの事

おほいどのくま野さんけい

みやこに大じやうゑおこなはるゝ事

第九十八句 これもしじすい……………三七六

これもりくまのさんけい

なちこもりのそうこれもり見しり

たてまつる事

これもりそとばのめい

よ三びやう衛いしどう丸じすい

第九十九句 いけの大なごんくはんとくたり……………三八一

やへいひやうゑむねきよじゆつくはい

よりともといけどのとさんくはい

たけさとみやこへのぼる事

しんていそくめ

平家卷第十

(へいけ一もんくびわたさるゝ事)

じゆゑい三年二月十二日、さんぬる七日一のたに、てうたれたる平家のくびども京へいる。平家にゑんをむすぶれたる人々、わがかたざまになに事をかきかんずらん、いか成めをか見んずらんとて、なげく人々おほかりけり。その中に大かくじにかくれみ給へるこまつの三ゐの中將のきたのかたは、さいこくへうちてのむかふときくたびに、こんどのいくさに中將のいかなるめにかあひ給はんずらんとしづ心なくおもはれるところに、平家は一のたに、てのこりすくなくほろび、三ゐの中將といふくぎやう一人いけどられてのぼり給へるとき、しかば、きたのかた、此人にはなれじ物をとぞなげかれける。ある女ばうのきたつて申けるは、三ゐの中將と申は、ほん三ゐの中じやうの御事にてわたらせ給ふと申ければ、さてはくびどものなかにぞあらんとて、なを心やすくもおもひ給はず。おなじく十三日太夫はんぐはんなりよりいげのけんびいしら、平家のくびどもうけとりて、おほちをわたし、ごくもんにかへべきよしそうしければ、ほうわうおぼしめしわづらはせ給ひて、大じやう大じん、ない大じん、ほりかはの大なごんたゞちか、い上くぎやう五人におほせあはせらる。大なごん申されけるは、此人々はせんていの御ときせきりのしんとして、ひさしくきみにつかへる、中にもけいしやうのくびおほちをわたさるゝ事せんれいなし。のりよりよしつねらが申じやう、あながちに御きよゆうあるべから

なりよりなかり
(第一本)

ずと申されければ、さてはわたされまじきにてありけるを、ちよしともかくびおほちをわたし、ごくもんにかけられ候ひぬ。ちよのはちをきよめんがため、きみの御いきどをりをやすめたてまつらんとそんじ候ひしかば、ちうをおもんじ、めいをかるんず。申こふところ御ゆるされ候はずは、じごんいごなにのいきみありてかてうてきをほろぼすべく候ぞやと、よしつねこれにいきどをり申されければ、さらばとてつみにわたされ、ごくもんにぞかけられける。見る人かはらにいちをなす。太かくじにかくれぬ給へるこまつ三あの中將のわか君六代御ぜんにつきたてまつりけるさいとう五さいとう六、むくはんなりけるうへ、いたう人にも見しられじ、此一二年はかくれぬたりけれども、あまりにおぼつかなぎに、さまをやつして見ければ、三あの中じやうどの、御くびは見え給はねども、みな見しりたるくびどもにてあるあひだ、めもあてられずおぼえて、なみだもさらにせきあへず。よその人めもあやしげなり。そらおそろしくおぼえて、いそぎ大かくじへたちかへる。きたのかたまづいかにやとどひ給へば、こまつどの、きんだちの中には、びつ中のかみの御くびばかりこそわたされさせ給ひつれ。そのほかそのくびくと申せば、いづれとても人のうへならずとてぞなかれける。さいとう五さいとう六かさねて申けるは、けふよくあんないしりたりけるもの、候ひしが申つるは、こまつ殿のきんだちは、はりまとたんばとのさかひなる三くさをかためさせ給ひて候ひけるが、源氏どもにやぶられて、はりまのたかきごより御ふねにめされ、さぬきのやしまへわたらせ給ひて候と申。さて三あの中將どのはいかにとどひしかば、その日のいくさいぜんに大じの御いたはりと

しのびたる……以下
(十三行、第二本なし)

て、やしまにわたらせ給ふあひだ、こゝろの御事はいくさにあひ給はずとこそ申候ひつれと申せば、きたのかた、いとをしや、それもとゞおもひなげきのつもりてやまひとなり給ひたるにこそ。いかなる御いたはりやらん、あなおぼつかなやとの給へば、わかぎもひめぎも、なにの御いたはりぞとはざりしかとぞの給ひける。さいとう五、身ばかりだにもしのびかねて候ものが、なにの御いたはりぞなんどまではとひ候はんずると申せば、きたのかたげにもとぞなけれける。三ぬの中じやうもかよふ心なれば、みやこにさこそわれをおぼつかなふおもふらめ。くびどものなかには見えざれども、水のそこにやしづみつらんとて、なげきなんどもすらん。いまだ此世にながらへたりとしらせばやとおもへども、しのびたるすみかを人に見えんもさすがなればとて、なくくあかし給ひけり。よるにもなれば、よ三びやう衛しげかげ、い七どう丸なんどいふもの共そばにめし、みやこにはたゞいまわが事をこそおもひいでつらめ。いとけなきもの共はわするゝとも、人はよもわするゝひまあらじ。とかくたゞひとりいつとなくあかしくらすはなぐさむかたもなけれども、ちぢせんの三ぬのうへを見れば、かしこくこそおさなきもの共をみやこにとゞめをきけるぞとて、なくくよろこび給ひけり。きたのかたあきんどのたよりに、ふみなんどのをのづからかよふにも、なにとていまゝでむかへとらせ給はぬぞや。とくしてむかへ給へ。おさなきもの共のめならずこひしがりたてまつる。われもつきせぬものおもひにながらへつべくもなしと、こまぐとかきつけられたりければ、三ぬのちう將此返事見給ひて、いまさら又なに事もおもひいり給ひ、ふししづみてぞなげかれけ

つかはれる一これま
で十三行宛一本、なし。

る。おほいどのも二あどのもこれをきゝ給ひて、さらばきたのかたおさなき人をもむかへとらせ給ひて、一しよにていかにもなり給へとの給へ共、わがみこそあらめ、人のためにはいかゞとて、なく／＼月日をくり給ふにぞ、せめての心ざしのふかきほどもあらはれける。さりてもあるべきならねば、ちかふめしつかはれけるさぶらひ一人したてゝみやこにのぼせ給ふに、三つのふみをぞかゝれける。きたのかたへの御ふみには、一日へんじのたえまをだにもわりなくこそおもひしに、むなしき日かずもへだゝりぬ。みやこにはかたきみち／＼て、わがみひとつのをきどころだにもなき、いとけなきもの共ひきぐして、さこそ心ぐるしくおはすらん。とくしてむかへとりたてまつり、一しよにていかにもならばやなんどはおもへども、御ために心ぐるしく候へばなんど、こま／＼とかきておくに、一しゆのうたをぞかゝれける。

いづくともしらぬあふせのもしほぐさかきをくあとをかたみとも見よ

いとけなき人の御ふみには、つれ／＼をばいかにしてなぐさむらん。とくしてむかへとらんぞ。さこそあらめなんどかひて、おくには六だいのへ、これもり、やしや御ぜんへ、これもりとかひて、日づけせられけり。これはわれいかにもなりてのち、かたみにも見よかしとてぞ、中じやうかゝれける。御つかひみやこへのぼりて、此ふみどもをたてまつる。きたのかたは見給ひて、おもひいりてぞなげかれける。御つかひいそぎくだるべきよし申せば、さるにても御返事あらんずるぞとて、なく／＼おきあがり、こま／＼と返事あそばされてぞ給りける。わか君ひめぎみふでをそめて、さて御返事はいかにかくべきやらんと申給へば、御ぜん、たゞ

ともかくもわごぜたちのおもはんずるやうにかけとぞの給ひける。なにとていまゝではむかへ
とらせ給はぬぞや。とくしてむかへとらせ給へ。あな御こひしや〜と、ことばもかはり給は
ず、二人どもにおなじことばにかゝれたり。御つかひやしまへ〜だり、此返事まいらせたりけ
れば、三ゐの中將きたのかたの御ふみよりも、わかぎみびめ君のこひし〜とがゝれたるを見
給てぞいまひときはせんかたなふはおもはれける。三ゐの中將、いまはいぶせかりつるふるさ
との事もつたへきゝ給へ共、さいしはもとより心をなやます物なれば、れんぼのおもひいやま
しなり。いまはゑどをいとふにいとまあり。ゑんぶあひしうのきづなつよければ、じやうどを
ねがふにものうし。こんじやうにてはさいしに心をくだき、たうらいにてはしゆらにおちん事
心うかるべし。さればこれよりみやこへのぼり、さいしを見てのち、まうねんをはなれて、じ
がいせんにはしかじとぞさだめ給ひける。

(やしまゐんせん)

同十四日ほん三ゐの中將しげひら、六でうをひがしへわたされ給ふ。にう道にも二ゐどのにも
おぼえのこにておはしければ、一もんの人々にももてなされ、ゐんだいへまいり給へば、たう
けもたけもところをきてうやまひしぞかし。これはたゞならをぼろぼし給へるがらんのぼち
にこそとぞ人申ける。六でうをひがしのかはらまでわたされてのち、こなかのみかど中なごん
ひゑなかのきやうのつくられたるぼりかはのみだうへいれたてまつる。とひの次郎さねひら

ほうわうこの前に、
第一本は内裏女房の事
がある。

は、もくらんちのひたゝれに、ひおどしのよろひきて、三ぬの中じやうどうしやししたてまつる。つはものども六十よ人ぐしてしゆごしけり。ぬより御つかひあり。くらんどのゑもんごんのすけさだなが、せきいにけんしやくをたいしてむかふ。三ぬの中將は、こんむらごのひたゝれに、をりゑぼしひきたてられたり。むかしはなにともおもはざりしさだながを、いまはめいどにてみやうくはんにもかへる心にておそろしげにぞおもはれける。さだなが申けるちよくちやうには、しよせん三じゆのじんぎをだにもみやこへいれたてまつらせ給はゞ、さいこくへつかはさるべきと候。此おもむき申させ給へと申ければ、三ぬの中じやう、いまはかゝる身となりて候へば、一もんおもてをあはすべしとおぼえず候。によしやうにて候へば、二ぬのあまなんどやいま一ど見んともおもはんずらむ。そのほかあはれをかくべきものあるべしとおぼえず候。さはありながら、ぬんぜんだにくだされば申てこそ見候はめとの給へば、さだなが此やうをそうもんす。ほうわうやがてぬんぜんをぞくだされける。そのぬんぜんにはく、一じんせんてい、きんけつほうれきのうてなをいでゝしやうにかうす。しかるあひだ三じゆのじんぎなんかいにうづもれて、すねんをふ。もつともてうかの御なげき、ばうこくのもとひなり。なかんづくかのしげひらのきやうは、とう大じじうしつのぎやくしんたるによつて、すべからくよりともあそんの申うくるむねにまかせて、しざいにおこなはるべきといへども、ひとりしんぞくをはなれて、いけどりとなる。ろうてうくもをこひて、おもひをはるかにせんりのなんかいにうかぶ。きがんとをうしなつて、心さだめてきうとの中とにか

よはんや。しかるときんば、三じゆのじんぎことゆへなくみやこへかへしいれたてまつらば、かのきやうにをひては、くはんゆうせらるべきものなり。あんぜんかくのごとし。よつてしつたつくだんのごとし。

じゆゑい三年二月十四日 大ぜんの大夫なりたゞうけ給る

とぞかゝれたる。あんぜんの御つかひには、御つぼのめしつぎ、はながたをくだされけり。三ゐの中將のつかひには、いにしへめしつかひし平ぎへもんのじうしげくにをつかはされけり。おほいどの、平大なこんどのへ、ちよくちやうのおもむきぢうく申くださる。はゝの二ゐどのにもこまかなる御ふみ共にて、いま一ど御らんぜんとおぼしめされ候はゞ、ないしどころの御事よくく申させ給へとぞかゝれたる。きたのかた大なごんのすけ殿へも、御ふみたてまつらばやとおもはれけれども、わたくしのふみをばゆるさねば、ことばにていくさはつねの事なれども、さんぬる七日をかぎりともしらずして、わかれたてまつりし事、心うくこそおぼえ候へ。ふさいは二世のちぎりとやらん申せば、ごしやうにてかならずむまれあひたてまつらんと申べしとぞの給ひける。御つかひやしまへくだり、此あんぜんをたてまつる。二ゐどのは、ほん三ゐの中じやうのふみを見給ひて、此ふみをしまぎ、おほいどの、御まへにたはれふし、の給ひけるは、なにのやうかあるべき。はやないしどころかへしいれたてまつり、中じやうたすけて見せ給へ。よにあらんとおもふも、こどものためなり。われをたすけんとおもひ給はゞ、中じやうをいま一ど見せ給へとぞなかれける。又人々の申けるは、ていわうの御くらゐをたも

これを以下、
一本詳細である。

たせ給ふと申は、ひとへにないしどころの御ゆへなり。これをみやこへかへしいれたてまつらば、君はなにの御たのみにてよにもわたり給ふべき。いかでかきみをすてまいらせて、おほくのちからをよび給はず。平大なごんときたゞ、みんぜんの御つかひ花がたをめしよせて、なみぢははながたか。さん候。なんぢおほくのなみぢをしのぎて、これまで御つかひしたる一ごがあひだのおもひで一つさせんとして、花がたがかほに、なみがたといふやきじるしをぞさゝれける。かへりまいりたりければ、ほうわうこれを急いらんあつて、よし／＼さらばなみがたともめせかしとぞおほせられける。さるほどに平家の人々、みんぜんの御返事をぞ申さる。

こん月十四日のみぜん、同廿八日さぬきの國やしまのいそにたうらいす。つつしんでうけたまはるところくだんのごとし。たゞしこれにつき、かれをあんずるに、みちもりのきやういげ、たうけすはい、せつしう一のたに、をひてうたれをはんぬ。なんぞしげひら一人がくはんゆうをよろこぶべきや。それわが君はたかくらのみんの御ゆづりをうけしめ給ひて、御ざいみすでに四かねん、まつりごとぎうしゆんのこはうをとぶらふところに、とういほくてきたうをむすびぐんをなしじゆらくするあひだ、かつうはゆうていばこうの御なげきもつともふかく、かつうはげしやくきんしんのいきどをりあさからず。しばらく九くにぎやうがうす。くはんかうなきにをひては、三じゆのじんぎいかでかぎよくたいをはなちたてまつるべきや。それしんはきみをもつて心とし、きみはしんをもつてたいとす。きみやすければしん

やすし。しんやすければ國やすし。きみかみにうれへあれば、しんしもにたのします。しん中にうれへあれば、たいぐはいによるこびなし。なうそ平しやうぐんさだもり、さうまの小次郎まさかどをついたうせしよりこのかた、とう八か國をうちしたがへ、だいぐせゝにてうかのせいうんをまぼりたてまつる。しかのみならずこ大じやうにう道、ほうげんへいちりやうどのかつせんにちよくめひをおもんじ、しめいをかろんず。そもくかのよりとは、さんぬるへいちぐはん年十二月、ちゝよしとものがむほんによつて、しざいにおこなふべきといへども、こ大しやうこくじひのあまりに申ゆるさるゝところなり。しかるにむかしのかうおんをわすれ、はうおんをぞんぜず、たちまちにけいるいの身をもつてほうきのらんをなす。しぐのはなはだしき事のぶるになをあまりあり。はやくしんめいの天ばつをまねき、ひそかにはいせきのそんめつをごするものか。それ日月は一もつのためにあきらかなる事をくらふせず、一人のためにそのはうをまげず、^(あ)一らくをもつてそのぜんをすてず。せうかをもつてそのこうををほふ事なかれ。しかるときんばたうけだいゝのほうこう、ばうぶすどのちうせつ、おぼしめしわすれずんば、きみかたじけなくもさいこくの御かうあるべきや。ときにしんらきみをはじめたてまつり、ふたゝびきうとにかへり、くはいけいのはちをきよめん。もししからずんば、しんらはくさい、きかいかうらい、けいたん、天ぢく、しんだんにいたるべし。かなしきかな、にんわう八十一だいにをよんで、わがてうかみよのれいほうを、いこくのたからとなさんや

とぞ申されける。三ゐの中じやうこれをきゝ給ひて、さこそあらんずれ、いかに一（も）んの人々しげひらをにくふおもはれけん、こうくはいし給へどもかひぞなき。

（しげひらじゆかい）

三ゐの中將とひの次郎をめして、しゆけの心ざしあるをばいかゞすべきとの給へば、とひの二郎、此やうを御ざうしに申。御ざうし、あんへさうもんせられけり。あるべふもなし。よりともに見せてのちこそほうしにもなさめとて、御ゆるされもなかりければ、ちからをよび給はず。わがざいせのときげんざんしたるひじりにごしやうの事を申あはせんとおもふはいかにとの給へば、といの二郎、御ひじりはたれにて候やらん。くろたにのほうねんばうとぞの給ひける。さらばとてほうねんしやう人をしやうじたてまつる。三ゐの中じやういでむかひたてまつり、申されけるは、さてもなんとをほろぼし候事、よにはみなしげひら一人がしよぎやうと申候なれば、しやう人もさこそおぼしめされ候らん。まつたくしげひらがげちたる事なし。あくたうおほくこもり候しかば、いかなるものゝしわざにてか候けん、ほうくはのじせつ、かぜはげしくふゐて、おほくのがらんをほろぼしたてまつる。すゑのつゆもとのしづくとなる事にて候なれば、しげひら一人がつみにて、むげんのそこにしづみ、しゆつりのごあらじとこそぞんち候ひつるに、みな人のしやうじんのによらいとあふぎたてまつるしやう人にふたゝびげんざんに入候へば、いまはむしのざいしやうもことくくしうめつし候ひぬとこそぞんち候へ。し

かい―寛一本には、詳
しい。浄土宗の教義を述
べる。

八でうのねうあん―以
下内裏女房の事、寛一
本は八島院室の前にあ
り。
まさとき―寛一本、知
時。

ゆつけはゆるさねば、ちからをよばず。もとゞりつきながらじゆかいさせ給ふべふや候らんと
申されければ、しやう人なくゝいたゞきばかりそり、かいをぞさづけ給ひける。その夜はし
やう人とゞまりましゝて、夜もすがらじやうどのしやうごんをくはんすべきさまゞほうも
ん共をぞの給ひける。三ゐの中將、心よかりけるぜんちしきかなとよろこふで、としごろつね
におはしましてあそび給ひしさぶらひのもとにあづけをかれたる御すゞりのありけるをめしよ
せて、これはこにう道しやうこくの、そうてうよりわたして、ひざうして候ひしを、しげひら
にたびてけり。なをばまつかげと申て、めいよのすゞりにて候。これを御めのかよはんとこ
にをかせ給ひて、御らんぜんたびにしげひらがゆかりとおほしめしうだして、ごせとぶらいて
たび給へとて、たてまつり給へば、しやう人これをうけとりて、ふところにいれ、なみだをを
さへいで給ふ。此すゞりはしんぶにう道しやうこく、しやきんをおほくそうてうのみかどへた
てまつり給ひたりければ、へんぼうとおほしくて、日ぼんわだの平大しやうこくのもとへと
て、をくられ給ひたりけるとかや。八でうのねうあん、むくうまのじうまさときといふさぶ
らひあり。あるくれがた、とひの次郎がもとへゆきて申けるは、中じやうどのゝもとめしつか
はれ候ひし、むくうまのじうと申ものにて候が、八でうのねうあん(ぎ)にけんあんの身にて候なり。
さいこくへも中將殿の御ともつかまつるべふ候つれ共、ゆみのもとすゑをもしり候はねば、た
ゞなんぢはとまれとおほせられ、さいこくへは御ともつかまつらず候。なじかはくるしかるべ
き。御ゆるされ候へかし。ゆふさりまいりて、なにとなき事ども申て、なぐさめまいらせんと

申せば、とひの二郎、かたなをだにもたいし給はずは、くるしかるまじと申あひだ、たちかた
なをあづけてげり。まさときまいたりければ、三ゐの中將これを見給ひて、いかにまさとき
か。さん候とて、その夜はとまりよもすがら、むかしいまの事どもかたりつゝけて、なぐさめ
たてまつる。夜もすでにあければ、まさときいとま申てかへらんとす。三ゐの中將、さても
やなんぢして物いひし女ばうのゆくゑはいかにとひ給へば、いまだ御わたり候が、たうじだ
いりにわたらせ給ふとこそうけ給り候へと申せば、さればこそかゝる身になり、されどもその
事がつねはわすられぬをばいかゞすべきとの給へば、まさとき、やすき御事に候。御ふみたま
はつてまいり候はんと申せば、三ゐの中將、やがてふみをかひてぞ給りける。しゆごのふしど
も、いかなる御ふみにて候やらん。いだしまいらせ（じ）と申。中じやう、見せよとの給へ
ば、見せてげり。くるしふ候まじとてとらせけり。まさときだいらへまいりたりけれ共、ひる
は人めもしげければ、そのへんちかきこ屋にたち入て日をまちくらし、たそがれどきにまぎれ
いりて、つばねのおりぐちのへんにたゝずみてきゝければ、此人のこゑとおほしくて、いくら
もある人のなかに、三ゐの中將どのしもいけどりにせられて、おほちをわたされ給ふ事、人は
みななどをやきたるつみのむくひといひあへり。中じやうもさぞいはれし。わが心よりおこ
してはやかね共、あくたうおほかりしかば、てゝにひをはなちて、おほくのだうしやをやきは
らふ。すゑのつゆもとのしづくとなるなれば、しげひら一人のざいぐうにこそならんずらめと
いひしが、げにさとおほゆるとかきくどき、さめぐとぞなかれける。まさとき、これにもお

もひ給ひける物をとあはれにおぼえて、もの申さんといへば、いづくよりとひ給ふ。三あの中將どのより御ふみの候と申。としごろははぢて見え給はぬ女ばうの、はしりいでてづからとつて見給へば、さいこくよりとらはれてありしありさま、けふあすともしらぬ身のゆくゑと、こまぐとをかきつゞけて、おくに一しゆのうたぞありける。

なみだがはうきなをながす身なれどもいまたびのあふせともがな

女ばう、ふみをふところにひき入て、とかくの事もの給はず。たゞなくよりほかの事ぞなき。やゝありて御返事をかき給ふ。心ぐるしくおぼつかなくて、二とせをくりつる心の中をかき給ひて、

きみゆへにわれもうきなをながすともそのみくづとともになりなん

まさときもちてまいりたり。又しゆごのふしども見まいらせんと申せば見せてげり。くるしふも候まじとてまいりする。中じやうふみを見給ひて、いよゝおもひやまさり給ひけん、とひの次郎にむかひての給ひけるは、としどろあひしりたる女ばうにたいめんして、申たき事のあるはいかゞすべきとの給へば、さねひらなさけあるものにて、まことに女ばうなんどの御事にてわたらせ給ひ候はんには、なにかくるしふ候べきとてゆるしたてまつる。中じやうなのめならずよろこびて、人のくるまをかりてまいらせ給へば、女ばうとるものもとりあへず、いそぎのりてぞおはしたる。ゑんにくるまをさしよせてかうと申せば、中じやうくるまよせにいでむかひ、しゆごのふしどもの見たてまつるにおりさせ給ふべからずとて、くるまのすだれをうち

かづゐて、てにてをとりくみ、かほをかほにをしあてゝ、しばしは物もの給はず。やゝありて三ゐの中將の給ひけるは、さいこくへくだり候ひしときも見まいらせたふ候へしかども、大かたのさはがしさに申べきたよりもなくてまかりくだり候ぬ。そのゝちはいかにもしてふみをもまいらせ御返事をもうけ給りたく候ひしかども、心にまかせぬたびのならひ、あさゆふのいくさにひまなくて、さながらむなしきとし月をゝくり候ひき。いま又人しれぬありさまを見え候へば、ふたゝび見たてまつるべきにて候ひけりて、そでをかほにをしあてける。たがひの心のうちをしはかられてあはれなり。かくてさ夜もながばになりければ、此ごろはおほちのらうぜきに候。とくゝとていだしたてまつり給ひけり。くるまをやりいだせば、中將なみだををさへつゝ、

あふ事もつゆのいのちももろともにこよひばかりやかぎりなるらん
ねうばうとりあへず、

かぎりとしてたちわかるればつゆの身の君よりさきにきえぬべきかな

さあつて女ばうはだいらへまいり給ひぬ。そのゝちはしゆこのぶしゆるしたてまつらねばちかをよばずゝときゝ御ふみばかりぞかよひける。此女ばうと申は、みんぶきやうにうだうちかのりのむすめなり。見めかたちすぐれ、なさけふかき人なり。さありて申じやうなんとへわたされてきられ給ひぬときこえしかば、やがてさまをかえて、かたのごとくのぶつじをいとなみごせをぞとぶらひける。

(しげひらあづまくだり)

なじか—いつのまにか、
一本

かまくらのさきのうひやうゑのすけよりもしきりに申されければ、三ゐの中じやうしげひらをば、三月十三日くはんとうへこそくだされけれ。かぢはらへいさうかげとき、とひの次郎がてよりうけとつてぐしたてまつりてぞくだりける。さいこくよりいけどられて、こきやうへかへるだにかなしきに、なじか又あづまぢはるかにおもむき給ひけん心のうちこそあはれなれ。あはたぐちをうちすぎて、四のみやかはらにもなりければ、こゝはむかしゑんぎのだい四のわうじせみ丸の、せきのあらしに心をすまし、脱文びはをだんじ給ひしに、はくがの三ゐ夜もすがら、あめのふる夜もふらぬよも、三とせがあひだ、びはのひきよくをつたへけん、わらやのこのきうせきも思ひやられてあはれなり。あふさか山をうちこえて、せたのながはし、こまもとゝろとふみならし、ひばりのぼれるのちのさと、しがのうらなみはるかけてかすみにくもるかゞみやま、ひらのたかねをきたにして、いぶきがたけもちかづきぬ。心とまるとはなけれ共、あれてなか／＼やさしきは、ふわのせきやのいたびさし、いかになるみのしほひがた、なみだにそではしほれつゝ、かのありはらのなにがしがからこもきつゝなれにしとゑいじけん、みかはのやつはしにもなりしかば、くもでに物をとあはれなり。はまなのはしをすぎければ、まつのこずゑにかぜさえて、いり江にさはぐなみのをと、さらでもたびは物うきに心をつくすゆふまぐれ、いけだのしゆくにぞつき給ふ。かのしゆくのゆうくんゆやがもとにぞやどし

給ふ。ゆやは三ゐの中將を見たてまつりて、いとをしや、いにしへは此御さまにてあづまがたへくだり給ふべしとはゆめにもおもはざりし事をと申て、一しゆのうたをぞたてまつる。

たびのそらはにふのこやのいふせきにふるさといかにこいしかるらん

三ゐの中じやう御返事に、

ふるさともこひしくもなしたびのそらみやこもつゐのすみかならねば

三ゐの中將かぢはらをめして、たゞ今のうたのぬしはいかなるものぞ。やさしふもつかまつりたる物かなとの給へば、かげときかしこまつて、きみはいまだしろしめされ候はずや、あれこそやしまのおほいどのゝたうごくのかみにてわたらせ給ひしとき、めされまいらせて御さいあい候ひしに、らうばのいたはりとしてしきりにいとま申けれども、給はらざりければ、ころはやよひのはじめにてもや候ひけん、

いかにせんみやこのはるもおしけれどなれしあづまの花やちるらん

とつかまつりて、御いとま給りてまかりくだり候ひし、かいだう一のめいじんにて候とぞ申ける。みやこをいで、日かずふれば、やよひもなかばすぎなんとす。とを山の花はのこるゆきかと見えて、うらくしまゝもかすみわたり、こしかたゆくすゑをおもひつゞけて、いかなるしゆくぐうやらんとかなしみ給へどかひぞなき。さよの中山にかゝり給ふにも、又こゆべしもおぼえねば、いやましあはれもかずそひて、たもとぞいたくぬれまざる。うつのかげをすぎゆけば、きたにとをざかりてゆきのしろき山あり。あれはいづくやらんととひ給へば、か

うつのやうな津の山邊
のつたのみちをも心ば
そくもうちこえて、一ば
本。

ひのしらねとぞ申ける。そのとき中じやう、

おしからぬいのちなれどもけふまではつれなきかひのしらねをも見つ

きよみがせきもすきゆけば、ふじのすそ野にもなりにけり。きたにはせいざんがゞとして、まつふく風もさくくたり。みなみはさうかいまんくとして、きしうつなみもばうくたり。

こひせばやせぬべし、こひせずもありけりとみやうじんのうたひはじめ給ひけん、あしがらの山もうちすぎ、いそがぬたびとはおもへども、日かずやうくかさなれば、かまくらへこそいり給へ。ひやうゑのすけ三ゐの中將にたいめんし給ひて、くはいけいのはぢをきよめ、きみの御いきどをりやすめたてまつらんとぞんじ候ひしかば、平家をほろぼしたてまつらん事あんぢうに候ひき。さるほどにまのあたりにかやうにげんざんにいるべしとはおもひもよらざりしかども、さだめていまはやしまのおほいどの、げんざんにも入つべしとこそおぼえ候へ。そもくならをほろぼし給ふ事、こ大じやうにう道の御はからひか、又りんじの御事に候か、はかりなきざいぐうにてこそとの給へば、三ゐの中じやうの給ひけるは、なんとゑんしやうの事、にうだうのせいばいにもあらず、しげひらがほつきにもあらず、しゆとのあくぎやうをしづめんがためにまかりむかふて候ひしほどに、ふりよにがらんめつばうにをよび候ひし事、ちからをよばず。むかしは源平さうにあらそひて、てうかの御まぼりたりしかども、きんらいは源氏のうんかたぶきたりし事は、ことあたらしく申べきにあらず。人みなぞんちの事なり。たうけはほうげん平治よりこのかた、ビゞのてうてきをたいらげ、かたじけなくも一天のきみの御げ

しやくとして、一ぞくのしやうしん六十よ人、廿よねんこのかたは、たのしみさかへ申ばかりなし。しかるにいまうんつきぬれば、しげひらとらはれてこれまでくだり候ひき。それにつきていわうの御てきをうちたるもの七だいまでてうおんうしなはずと申事はきはめたるひが事に候けり。まのあたりににう道は君の御ためにいのちをうしなはんとする事たび／＼にをよぶといへども、わづかにその身一だいのさいはひにて、しそんかやうにまかりなるべくや。されば一もんうんつきてみやこをすでにおちしうへは、かばねはさんやにもさらし、がうかいにもしづめべしとこそぞんぢ候ひつれ。これまでくだるべしとおもひよらず。いんのちうはかたいにとらはれ、ぶんわうはゆうりにとらはる。ゆみやとる身のかたきにてとらはれてほろぼさるゝ事、むかしよりみなある事なり。しげひら一人にかぎらねば、はちつべきにあらねども、ぜんぜのしゆくぐうこそくちおしふ候べ。たゞはうおんにはとく／＼くびをはねらるべく候どのたまひて、そのゝちはものをもいひ給はず。かちはらこれをうけ給はり、あはれ大しやうぐんやと、なみだをぞながしける。そのぎにあたりけるさぶらひども、みなそでをぞぬらしける。なんとをほろぼしたるがらんのできなれば、大しゆさだめて申むねあらんずらむとて、いづの國のちう人かのゝすけむねもちにあづけらる。そのていめいどにてしやばせかいのさい人を、七日／＼に十わうのてにわたすらんも、かくやとおぼえてあはれなる。かのゝすけなさいあるおとこにて、さま／＼にいたはりなぐさめたてまつる。ゆどのをこしらゑ御ゆひかせたてまつりなんどしけり。あるときゆどのにおり給ひけるところに、よはひ廿ばかりなる女ばうの、い

ろしろふきよげなるが、めゆひのかたばらにそめつけのゆまききて、ゆどののをひらきまいらんとす。三ゐの中じやう、いかなる人ぞととひ給へば、ひやうゑのすけどのよりおゆどのゝためにまいらせられて候とて、十四五ばかりなるをんなわらはの、はんごうたらいに、くしいれまいりたり。二人にかいしやくせられて、かみあらひ、ゆあびなどしてあがり給ひぬ。此女ばうかへらんとて、いとまごいして申けるは、なに事にても候へ、おぼしめさん御事をばうけ給はつて申せとこそ、ひやうゑのすけどのよりうけ給はつて候ひつれと申。中じやうわらひて、しげひらたゞいまなに事をか申べき。ちかくきらるゝべき事もやあらんとおもへば、かみこそそりたけれどとの給へば、此女ばうかへりまいりて、このやうを申せば、ひやう衛のすけがわたくしのかたきにあらず、すでにてうてきとなれる人なり。しゆつけの事あるべふも候はずとぞの給ひける。三ゐの中じやう、しゆごのぶしにむかひ、さても此けいせいはいたいけしたるものかな。なをばなにといふやらんとの給へば、かのゝすけかしこまつて申けるは、あれはてごしのちやうじやがむすめにて候が、心ざまのゆうにやさしく候とて、ひやうゑのすけどの、此三四ねんめしつかはれ候が、なをば、せんじゆのまへと申候。ひやう衛のすけ殿、三ゐの中じやうかやうにの給ふよしつたへきゝ給ひて、此女ばうをはなやかにしたゝせて、三ゐの中將のもとへつかはさる。そのゆふべあめふり、世の中うちしづまりて、ものすさまじかりけるおりふし、くだんの女ばう、びはことをもちてまいりたり。かのゝすけもいゑのこらうどう十よ人ぐして御ぜんにまいり、さけすゝめたてまつらんとす。かのゝすけかしこまつて申けるは、

ひやう衛のすけ殿より、よく／＼みやづかひ申せ、けだいにてよりともうらむなとうけ給はつて候へば、むねもちは心のをよばんほどはみやづかい申さんずるとて、御しゆすゝめたてまつる。せんじゆのまへしやくをとりてまいりたりけれ共、中じやう、いときうもなげにおはしければ、かのゝすけ、なに事にても候へ申させ給へかしと申せば、せんじゆしやくをさしをひて、らきのちういたるは、なさけなき事をきふにねたまるといふらうゑいしたりければ、中じやうこれをきゝ給ひて、此らうゑいせん人は、きたのゝてん神一日に三たびかけりまばらんとせいぐはんまし／＼けり。され共しげひらこんじやうははやすてはてられたてまつりぬ。さればじよいんしてもなにかせん。いまはたゞざいしやうからくなるべき事ならば、なびきたてまつるべしとぞの給ひける。せんじゆ又しやくをさしをひて、十あくといへどもなをいんじうす。ごくらくをねがふ人はみなみだのみやうがうとなふべしといふいまやうをうたひすましたりければ、中じやうそのとき、さかづきをかたぶけられて、せんじゆのまへに給る。せんじゆのみて、かのゝすけにさす。かのゝすけのむとき、せんじゆことをひきすす。中將わらつて、此がくはふつうには五じやうらくとこそ申せども、しげひらがためにはごしやうらくとこそくはんずべけれ。されどもやがてくはうじやうのきうをつがばやとたはぶれ給ひて、びはをとり、てんじゆをねちて、くはうじやうのきうをぞひかれける。かのゝすけがさかづきをみないゑのこらうじうのみくだしてげり。さよもやう／＼ふけゆけば、よのなかもうちしづまりて、いとゞ物あはれなりけるに、三ゐの中將心をすましておはしけるおりふし、とぼしびのき

えたりけるを見給ひて、三ゐの中將、とぼしびくらふしてはすかうぐしがなんだ、夜ふけて四めんそかのこゑといふらうゑいをなくくぞせられける。此しの心は、むかしかんのかうそと、そのかううとかつせんする事七十よど、いくさごとにかうそはまけ給ふ。され共つゐにはかううまけておちゆくとき、ぐしといふさいあいのきさきになごりをおしみ給ふおりふし、とぼしびさへきえて、たがひにかたちをあひ見る事なくして、なくくわかれけるとぞうけ給る。三ゐの中將心をすまし給ひて、やごぜ、あまりにおもしろきになに事にてもいま一どゝの給ひければ、せんじゆ心をすましつゝ、一じゆのかげにやどり、一がのながれをくむもこれぜんぜのしゆくゑんなりといふしらびやうしを、かへすくうたひすましければ、三ゐの中じやう、よにもおもしろげにぞの給ひける。夜もすであけゆけば、せんじゆはいとま申てかへりけり。そのあしたひやう衛のすけ殿は、ちぶつだうに御きやうどくじゆしてましゝけるところに、せんじゆまいりたり。ひやうゑのすけせんじゆを御らんじて、よりともはせんじゆにおもしろきなかだちをしたるものかなとの給へば、さいめんのじくはんちかよし、あなたに物かきて候ひしが、なに事にて候やらんと申せば、ひごろは平家の人々は、ゆみやのしうぶのほかはたじあらじとこそおもひつるに、此三ゐの中じやうは、ひばのばちをと、くちずさみのやう、夜もすがらたちぎゝしたるに、これほどゆうなる人にておはしけるいとをしさよとぞの給ひける。ちかよしふでをさしをひて、たれもさだにうけ給はつて候ひしかば、たちぎゝつかまるべふ候物を。いかに御ちやう候はぬやらん。平家はだいゝぶんじん、かじんたちにて候物

を。一とせ平家の一もんを花にたとへ候ひしとき、此人はぼたんの花にたとへ候ひしぞかしと申ければ、ひやう衛のすけどの、まことにゆうなる人にてまし／＼けるとて、のちまでもありがたくこそその給ひけれ。それよりしてこそせんじゆのまへはいとおもひもふかはなりにつれ。されば中じやうなんとへわたされて、きられぬるときこえしかば、さまをかへ、しなのゝくにぜんくはうじにおこなひすまして、かのごせぼだいをとぶらひ、わが身もわうじやうのそくはいをとげにけり。

(よこぶえ)

さるほどに、こまつの中將これもりは、わがみはやしまにありながら、心はみやこへかよはれけり。こきやうにのこしをき給ふきたのかた、おさなき人々の事を、あけてもくれてもおもはれければ、あるにかひなきわが身かなど、いとゞものうくおぼえて、じゆゑい三年三月十五日のあかつき、しのびてやしまのたちをまぎれいで給ふ。めのとのよ三びやうゑしげかげ、いしどう丸といふわらは、下らふにはふねもよく心ゑたるものなればとて、たけざとといふとねり、これら三人ばかりめしぐして、あはの國ゆきのうらより、あまをぶねにのり給ひ、なるどのおきをこぎわたり、こゝはゑちぜんの三ゐのきたのかた、たえざるおもひに身をなげしところなりとおもひければ、ねんぶつ百べんばかり申つゝ、きのちへおもむき給ひけり。わかふきあげのはま、そとをりひめのかみとあらはれおはします、たまつしまのみやう神、にち

かのをんな―以下五行、
第一本なし。

ぜんこんけんの御まへのおきをすぎ、きいの國くら井のみなどにこそつき給へ。これよりうら
づたい山づたいにみやこにゆきて、こひしきものどもをいま一ど見もし見えもせばやとおもは
れけれ共、ほん三あの中じやうしげひらのいけどりにせられて、京かまくらひきしろはれて、
はちをさらし給ふだにも心うきに、此身さへとらはれて、うきなをながし、ちゝのかばねにち
をあやさんもさすがにて、ちたび心はすゝめども、心に心をからかひて、ひきかへかうやの御
山へのぼり給ひけり。かうやにとしごろしられるひじりあり。三でうさいとうさゑもんの大
夫もちよりがこに、さいとうたきぐちときよりといふものなり。もとはこまつどのゝさぶらひ
なりしが、十三のとき、ほんじよへまいり、みやづかひしたてまつる。けんれいもんぬんのざ
うしによこぶえといふをんなをおもひて、さいあいしてかよひけり。かのをんなのゆらいをく
はしくたづぬるに、もとは江ぐちのちやうじやがむすめなり。こ大じやうにう道殿ふくはらげ
かうのとき、ちやうじやがしゆくしよへいり給ふに、よこぶえ十一さいと申に、へいじどりに
ぞいでたりける。にう道これを見給ふに、見めかたちゆうなりければ、中ぐうのざうしにめさ
るゝ。かゝるわりなきびじんなれば、よこぶえ十四、たきぐち十五と申としよりあさからずお
もひそめてぞかよひける。ちゝもちよりこれをきゝ、なんぢをよにあらんものゝむこにもなし
て、よきありさまを見きかんとこそおもひしに、いつとなくしゆつしもけだいがちなる物かな
と、あながちにこれをせいしけり。たきぐち申けるは、せいわうぼときゝし人、むかしはあり
ていまはなし。とうばうさくが九千さいも、なをのみきゝてめには見ず。らうせうふぢやうの

世の中は、せきくわのひかりにことならず。たとへば人のいのちながしといへども、七八十をばすぎず。そのうちに身のさかりなる事、わづかに甘よねんをかぎれり。ゆめまぼろしのよの中に、見にくきものをば、へんじも見てはなにかせん。おもはしき物を見んとすれば、ちゝのめいをそむくにいたり。ちゝのめいをそむかじとすれば、五百しやうまでふかからんをんなの心をやぶるべし。とにかくにちゝのため、をんなのため、これすなはちぜんちしきのもどひなり。うきよをいとひ、まことのみにいらんにはしかじとて、たきぐち十九にて、ほだいしんをおこし、もとゞりきりて、さがのおく、わうじやうみんといふ所におこなひすましてゐたりけるに、よこぶえこれをつたへきゝて、われをこそすてめ、さまをさへかへけん事のむざんさよ。たとひよをこそいとふとも、なじかはかくとしらせざらん。人こそ心つよくとも、たづねていまはうら見んとおもひつゝ、人一人めしぐして、あるゆふがたにだいをいでゝ、さがのおくへぞあこがれゆく。ころはきさらぎ十日あまりの事なれば、むめづのさどのはる風に、つゞきのさとやにほふらん、おほ井がはの月かげも、かすみにこもりておぼろなり。一かたならぬあはれさも、たれゆへかそこそおもひけれ。わうじやうみんとはきゝたれども、さだかなるところをしらざりければ、ここにたゝずみ、かしこにたゝずみ、たづねかぬるぞむざんなる。とうろのひかりのほのかなるにめをかけて、はるゝわけ入、すみあらしたるあんじつにたちよりきゝければ、たきぐちとおぼしくて、うちにねんじゆのこゑしけり。めしぐしたるをんなをいれて、わらはこそこれまでたづねまいりたれと、しばのあみどをたゝかせければ、たきぐちにう道

よこぶえー以下四行寛
一本なし。

むねうちさはぎ、しやうじのひまよりのぞきて見れば、ねくだれがみのひまよりも、ながるゝ
なみだぞところせく、こよひもいねやらぬとおぼえて、おもやせたるありさま、たづねかねた
るけしき、まことにいたはしく見えければ、いかなるだうしんじやも心よほくなりつべし。た
きぐち、いまはいであひ、げんざんせばやとおもひしが、かく心がひなくしては、ぶつだうな
りやならざるやと心に心をはぢしめて、いそぎ人をいだして、まつたくこれにはさる人なし。
かどたがひにてぞ候らんとて、心づよくもたきぐちはつみにあはでぞかへしける。よこぶえ、
うらめしや、ほつしんをさまたげたてまつらんとにはあらず、ともにあかのみづをむすびあげ
て、ひとつはちすのゑんとならんとこそぞみに、おつとの心はかはのせの、せつなにかはる
ならひかや、をんなの心はいけの水のつもりて物をおもふなるも、いまこそ思ひしられけれ。
たきぐちにう道どうしゆくのひじりにむかひて申けるは、こゝもあまりにしづかにて、ねんぶ
つのしやうげはなけれども、あかでわかれしをんなに此すまめを見えて候へば、一どは心づよ
くとも、又もしたふ事あらば、心うごく事もや候べし。いとま申てとて、さがをばいで、かう
やへのぼり、しやうぐゝおんにおこなひすまして(ゐたりけり)。よこぶえもさまをかへたるよ
しきこえければ、たきぐちにうだうかうやより、あるたよりに一しゆのうたをぞをくりける。
そるまではうらみしかどもあづさゆみまことのみにいるぞうれしき

よこぶえ返事に、

そるとてもなにかうら見んあづさゆみひきとゝむべき心ならねば

そのおもひのつもりにや、よこぶえならのほつけじにありけるが、ほどなくしゝてけり。たきぐち入道此事をつたへぎゝて、いよゝおこなひすましてゐたりければ、ちゝのふけうもゆるされたり。したしきもの共は、かうやのひじりの御ばうとぞもてなしける。かうやの人は、なしのもとのおじやうばうと申、ゆらいをしりたるものは、たきぐちにう道とも申しけり。

(かうやのまき)

さるほどに三ゐの中將これもり、かうやへのぼり、あるあんじつにたちより、たきぐちをたづね給ひければ、うちよりひじり一人いでたり。すなはちたちぐちにうだうこれなり。此ひじりはゆめの心ちして申けるは、此ほどはやしなにわたらせ給ふとこそうけ給はつて候ひつるに、なにとしてこれまでつたはり給ひて候やらん。さらにまぼろしともうつゝとおおぼえずとて、なみだをながす。申じやう見給ふに、ほんじよにありしときは、ほいにたてゑぼし、ゑもんかひつゝろひ、びんをなでゝ、ゆうなりしおとこの、しゆつけのゝちは、いまはじめて見給ふ、いまだ三十にだにたらぬものゝ、らうそうすがたにやせおとろへ、こきすみぞめのころもにおなじけさ、かうのけぶりにしみかほり、さかしげにおもひいりたるだうしんすがた、うらやましふやおもはれけん、かんの四かうがすみけんしやうざん、しんの七けんがこもりしちくりんのすまひも、かくやとおぼえてあはれなり。三ゐの中將の給ひけるは、人なみゝに都をいでゝ、さいこくへおちくだりしかども、たゞ大かたのうらめしさもさる事にて、こきやうにとゞ

大しの―以下四行、寛
一本なし。

すけずみ―寛一本、寛
隆。

めをきしをさなきもの共が事をのみ、あけてもくれてもおもひゐたれば、物おもふ心のほかに
しるうや見えけん、おほいどのも二ゐどのも、いけの大なごんのやうに此人もふた心あらんと
て、うちとけ給はねば、いと心もとゞまらず、やしものたちをまぎれいで、これまでまよひき
たれり。これより山づたいにみやこへゆき、こひしきもの共見もし見えばやなんど、おもへど
も、それもしげひらが事のくちおしければ、はやおもひきりたる也。おなじくはこれにてもと
ゞりをきり、ひのなか水のそこにもいらんとおもふぞや。たゞしくまのへまいらんとおもふし
ゆくぐはんありとの給ひもあへず、はら／＼とぞなかれける。たきぐちにうだう申けるは、ゆ
めまぼろしの世の中は、とてもかうても候ひなん。たゞながきよのやみこそ心うく候へとて、
やがてたきぐちにう道せんだちにて、だうたうじゆんれいして、おくのめんへぞまいり給ふ。
大しの御べうをはいし給ふに、心もことばもをよばれず。大たうと申は、なんでんのてつたう
をへうして、たかさ十六ちやうのたほうなり。こんだうと申は、とそつのまにでんをへうし
て、四十九ゐんにつくられたり。上には千たいのあみだによらい、中ぞんはやくしの十二じ
ん、せんじゆの廿八ぶしゆ、みなこれ大しの御さくなり。そも／＼ゑんぎのみかどの御とき、
御むさうのつげあり。ひはだいろのぎよいをかの御山へをくられるに、ちよくし中な言すけ
ずみのきやう、はんにやじのそうじやう、くはんげんあひぐして、おくのめんへまいり給ひ
て、せきしつのみとをひらき、ぎよいをきせたてまつらんとしけるところに、きりふかくへだ
ゝりて、大しおがまれ給はず。そのときそうじやうひるいをながして、われひばのたいないを

じゆとうのしづの、
覺一本

いで、ししやうのしつに入しよりこのかた、きんかいをおかさず。さればなどかおがまれ給はざらんと五たいをちになげ、ほつろていきうし給へば、せん／＼にきりはれて、山のはより月のいづるがごとくにして、大しおがまれ給ひけり。くはんげんずいきのなみだをながし、ぎよいをめさせたまつる。御かみのながくをひさせ給ひたりけるを、そうじやうそりたまつり給ひけり。いし山のないくう、じゆんゆうそのときはいまだどうぎやうにてぐぶせられけるが、大しを見たまつらず、なげきしづみておはしけるところに、そう正かのないくうのてをとりて、大しの御ひぎのほどにをしあてられしかば、御身あたゝかにしてさはらせ給ひけり。そのて一ごがあひだかうばしかりけるとかや。そのうつりがはいし山のしやうぎうにとゞまりて、いまにあるとぞうけ給る。大しみかどの御返事に、われむかしさつたにあひたまつり、まのあたりこと／＼くいんみやうをつたへ、むひのせいぐはんをおこして、へんちいゝきにはんべる。てうやばんみんをあはれんで、ふげんのひぐはんにちうす。にくしんに三まいをしうじて、じしのげしやうをまつとぞ申させ給ひける。かのまかかしうのけいそくのほらにこもり、じゆとうのはるの風をこし給ふらんもかくやとぞおぼえたる。かうやさんと申はていじやうをさつて二はくり、きやうりをはなれてむにんじやう、せいらん木ずゑをならし、せきじつのかげのどかなり。八ようのみね、八ツのたにがゞとしてそびえたり。ひう／＼としてかぎりもなし。みねのあらしはげしくして、しんれいのこゑにまがふ。花のいろはりんむのそこにほころび、かねのこゑはおのへのくもにひゞきけり。かはらにまつをひ、かきにこけむして、せざう

ひさしくおぼえたり。せつぼうしゆゑのにはもあり、ざぜんにうちやうのまどもあり。ねんぶつ三まいのうてなもあり。天ちくよりまかかしのわたされて、大しさうでんし給ひし七ちうのけさもあるとかや。御にうちやうはじうわ二年三月廿一日とらのこくの事なれば、すぎにかたも三百よさい、ゆくすゑもなを五十六おく七千まんざいのち、じそんしゆつせ、三ゑのあかつきをまたせ給ふらんひさしさよ。

(これもしゆつけ)

これもりが身はせつさんのとりのなくらんやうに、けふよあすよと物をおもふ事よとて、なみだにむせぶぞいとをしき。しほ風にやせくらみ給ひて、その人とは見えねども、なべての人にはまがふべくもなし。その夜はたきぐちにうだうがあんじつにかへりて、よもすがらむかしいまの事をこそかたり給ひけれ。ひじりがぎやうぎを見給へば、しごくしんぐのとこのうへには、しんりのたまをみがくらんと見え、ごやしんてうのかねのこゑは、しやうじのねぶりをさますらんとおぼえたり。よをのがるゝべくんば、かくもあらまほしくぞおもはれる。夜もすでにあげければ、三ゐの中じやう、かいのしをしやうじたてまつらんと、とうぜんゐんのひじり、ちかくしやう人を申うけて、しゆつけせんといでたち給ひけるが、よ三びやう衛、いしどう丸をめして、われこそみちせばくのがれがたき身なれば、いまはかくなるとも、なんぢらはみやこのかたへのぼり、いかならん人にもみやづかひ、身をたすけ、さいしをはぐゝみ、又こ

りんぼく以下四行、
寛一本なし。

れもりがのちのよをもとぶらひなんどもせよかしとの給へば、しげかげもいしどう丸も、はら／＼となきて、しばしも物も申さず。やゝあつて、よ三ひやう衛なみだををしのごふて申けるは、おやにて候し、よ三ざへもんかげやすは、へいちのかつせんのとき、こまつどのゝ御ともは候ひけるが、二でうほりかはのへんにて、あくげんだに御むまをいさせ、りんぼくのうへにはねおとされ給ふ。よしとものめのと、かまだひやう衛まさきよよろこふでかゝり候ひけるに、かげやすなかにへだたり、かまだとくみしに、あく源太おちあひて、かげやすうたれ候ひぬ。そのまぎれにしげもり御のりかへにめされ、二でうをひがしにはせのび給ふ。しげかげそのときは二さいとかやにて候ひし。七さいにしてはゝにをくれ、そのゝちはあはれむべきしたしきもの一人も候はざりしに、こまつどの、あれはわがいのちにかはりたるものゝこなればとて、ことにふびんにまし／＼て、九つのとしきみの御げんぶく候ひしに、五だいがおとこになるなれば、まつわうもうらやましからんとて、おなじくもとゞりとりあげられまいらせて、もりのじはいゑのじなれば五だいにつくる。しげのじをまつわうにたぶとて、しげかげとはなのらせまし／＼けり。又わらはなをまつわうと申事も、むまれて五十日と申に、ちゝがいだいてまいり候ひければ、此いゑをこまつといへば、なんちがこをばいはひてとて、まつわうと給りけり。御げんぶくのゝちは、とりわききみの御かたに候ひて、こんねんすでに十九年になるとこそおぼえて候へ。うへしたもなくあそびたはぶれまいらせて、一日へんじもたちはなれたてまつらず。おやのよくしてしにけるも、わがみのみやうがとこそぞんち候へ。さればしげもり御

りんじうのとき、此世の中をばみなおぼしめして、一こともおほせの候はぎつしかども、し
げかけを御せんちかふめして、なんぢがちゝはしげもりのちにかはりたるものぞかし。さ
ればなんぢはしげもりをちゝのかたみとおもひ、しげもりはなんぢをかげやすがたみとこそお
もひてすごしつれ。こんどのちもくにゆげいのじうになして、をのれがちゝかげやすをよびし
やうにめしつかはばやとおもひしに、かくなる身こそくちおしけれ。せうしやうどのの御かた
に候ひて、あひかまへてゝ心にちがはずみやづかひ申候へとこそ、さいごのおほせまでもう
けたまはり候ひしが、きみもひごろは御いのちにもかはりまいらすべきものとふかくおぼしめ
しつるに、いまさら見すてまいらせよとおほせ候御心のうちこそはづかしふ候へ。そのうへ世
にあらん人をたのめとおほせ候。たうじは源氏のらうどう共こそ候なれ。きみのかみにもほと
けにもならせ給ひてのち、(た)のしみさかへよにあるとも、ちとせのよはひをのぶべきか、
たとひまん年をたもつとも、つめにおはりのなかるべきか。せいわうぼが三千年、むかしがた
りにいまはなし。とうばうさくが九千さい、なのみのこりてすがたなし。これぞせんぢしきの
もとひにて候とて、てづからもとゞりきりて、たきぐちにう道にそらせ、やがてかいをぞたも
ちける。いしどう丸もたきぐちにうだうにかみそらせ、おなじくかいをぞたもちける。これも
八さいのときよりつきたてまつりふびんにし給ひしかば、しかげにをもとらずおもひたてま
つる。これらがかうにさきだつありさまを見給ひて、ちうじやういよく心ぼそふおぼしめ
して、御なみだいとゞせきあゑ給はず。さてもあるべき事ならねば、るてん三がい中おんあいふ

のうだん、きおんにうむゐ、しんじつほうおんしやと三べんとなへて、そりくだし給ひけるに
も、ふるさにとゞめをきしきたのかた、おさなき人々に、いま一どかはらぬすがたを見えも
し、見もしてかくならばおもふ事あらじとおもはれけるぞつみふかき。三ゐの中將も、よ三ひ
やう衛も、どうねんにてこんねんは廿七とかや。いしどう丸は十八さい。ふぢやうのさかひは
まことなれども、いまだゆくすゑははるかなり。その、ちどねりたけさとをめして、なんぢは
われおはらんを見つる物ならば、やがてみやこへのぼすべしとおもひつれども、つゐにかくれ
あるまじき事なれば、しばらくはしらせじとおもふなり。そのゆへは、みやこにゆきて此世に
なきものと申ならば、さだめてさまをもちへ、かたちをもやつさんずるもふびんなり。おさな
きものどもがなげかん事もむざんなり。むかへとりなどせんとこしらゑをきしことのはも、み
ないつはりとなりぬべし。やしまにのこりゐるさぶらひどもがおぼつかなくおもふらんも心う
ければ、たゞやしまへわたさんとおもふぞとよ。しん三ゐの中將に、ありつるありさまを申べ
し。御らんじ、やうに、大かた世の中もものうきさまにまかりなりぬ。たのみすくなき事もか
ずそひて見え候ひしかば、をのゝにもしらせまいらせず、うかれいでゝかくなり候ひぬ。さ
いこくにてはひだんの中じやううせ候ひぬ。一のたにゝてびつ中のかみうたれ、これよりさへ
かくなり候へば、いかにをのゝたよりなふおぼしめされ候はんずらん。これのみ心ぐるしふ
候。そもゝからかはといふよろひ、こがらすといふたちは、平しやうぐんさだもりより、た
うけちやくゝにさうでんして、これもりまでは九だいにあたるなり。そのよろひとたちは、

さだよしがもとよりとりて、しん三ゐの中將どのにあづけをきたてまつる。ふしぎにて平家のよにもたちなをらば、六だいにたべと申べしとぞの給ひける。たきぐちにう道をぜんちしきとしてめしぐせられ、山ぶししゆぎやうじやのやうにて、かうやをたち、まづこかはのくはんをんにまいり給ひ、一夜つうやして、なむ大じ大ひ、ねがはくはこれもりがしゆくぐはんじやうじゆといのりつゝ、きいの國さんとうへこそいでられけれ。三どうのわうじをはじめたてまつり、ふちしろのわうじいげ、わうじくをふしをがみ、さかのぼりて、わかふきあげ、たまつしまをかへりみ、又いつまいるべしとおおほえねば、心になみだぞすゝみける。千里のはまぢをさすほどに、いはしろのわうじのへんにて、かりしやうぞくしたるぶし七八きがほどにあふたりけり。そのときすでにから(め)とられんとおもひて、をのくこのかたなにてをかけ、じがいせんとおもひ給ふところに、これらは見しまいらせたりけるにや、あやしむべきけしきもなくして、みなむまよりおり、ふかくかしこまつてぞとをしける。こはいかに、たれなるらん。見しりたるものにこそとおほしめされければ、いとゞあしばやにぞとをられける。かたきにてはなかりけり。平家ふだいのけにんに、たうごくのちう人、ゆあさごんのかみむねしげがこに、七郎びやう衛むねみつと申ものにてぞ候ひける。七郎びやうゑがらうどうども、いかなるしゆぎやうじやたちにて御わたり候やらんととひければ、むねみつうちなみだぐみて、あなこともかたじけなや、これこそ大じやうにう道どの、御まご、こまつのおとゞの御ちやくし、三ゐの中將どのよ。此人こそ日ばんごくのあるじ、こまつどの、御ときは、ちゝゆあさごんの

むかひのきし以下、
十二行、覚一本なし。
巻四、無文と重複する
所がある。

かみさぶらひのべつたうにつかまつりしかば、しよ大みやうにあふがれき。此君世にまさば、われ又さこそあらんずるに、かくなりはて給ふいとをしさよ。此ほどはやしまにおはしますとこそうけ給はりつるに、これまではなにとしてつたはり給ひけるやらん。はや御さまかへさせ給ひけり。げんざんにいりたくはおもへども、はゞからせましますとおぼえければ、おもひながらうちすぎぬ。よ三びやう衛、いしどう丸もおなじくさまかへ御ともしたるぞや。くま野ちのかたへおぼしめすとおぼえたり。ゆめのやうなる事どもかなとて、なみだにむせびければ、らうどうどもひたゝれのそでをぞぬらしける。いはだだがはにもつきしかば、此かはを一たびわたる人、あくぐうぼんなう、むしのざいしやうもしうするなる物をと、たのもしくぞわたり給ふ。むかひのきしにあがりたちかへり、水のおもてをまばらへて、さめぐとなき給ふ。たきぐち、とにかくにつきぬ御なみだにて候。さりながらたゞいまなに事をおぼしめしいで候やと申ければ、三ゐにう道、なんちほしらずや、さんぬるおしう三年五月のころ、おとゞくまのさんけいのとき、これもりをはじめとして、しん三ゐの中將、ゑちぜんのじやう、さ中じやう、四ゐのせうしやうきやうだい四人、げかうのみちにをよぶ。そのころあさぎぞめのめづらしければ、じやうゑのしたにあさぎのかたびらをき、此かはにて水をたはぶれしに、われらがきたりしじやうゑみないろのすがたにて見えしを、さだよしがとがめ申やう、きんだちの御じやうへいまゝしく見えさせ給ふ。かへたてまつらんと申せしを、おとゞ御らんじてあるべからず。あらたむべからずとて、これより又よろこびのほうへいをたてまつる。おなじく五月廿八日よ

りあくさうわづらはせ給ひて、同八月一日かくれさせ給ひぬ。たゞいまのやうにおぼえて、ふかくのなみだをさへがたしとの給へば、たきぐちをはじめて御ことはりとぞかんじける。

(これもりじすい)

これもりまづしうじやうでんの御まへにまいり、ほつせまいらせて、御山のやうをはいし給ふに、心もことばもよばれず。大ひおうごのかすみはゆやさんにそびえき。れいげんぶさうのしんめいは、をとなしがはにあとをたれ、かの一じうしゆぎやうのみねには、かんおうの月くまもなし。六こんざんげのにはには、まうざうのつゆもむすばず。いづれもくあはれをもよをさずといふ事なし。よもすがらきねん申されけるなかに、ちくおとゞぢしうのころ、此御まへにていのちをめし、ごせをたすけさせましと申させ給ひけん事おもひで、あはれなり。ほんちみだによらいにておはしければ、せつしゆふしやのほんぐはんあやまたず、さいはうじやうどへむかへ給へとかきくどき申されける。中にもこきやうにとゞめをきしさいしあんおんといのられけるこそかなしけれ。うきよをいとひ、まことのみににiri給へども、まうじうはなをつきずとおぼえて、いよくあはれはまさりけり。それよりふねにのり、しんぐうへまいり、かんのくらをおがみ給ふに、がんしうたかくそびえて、あらしまうざうのゆめをやぶり、りうすいきよくながれて、なみぼんなうのあかをそくぐらんとおぼえたり。あすかのやしろをふしおがみ、さのくまづばらさしすぎて、なちのみ山へさんけいす。三ちうにみなざりお

つるたきのみづ、すせんちやうまでよぢのぼり、くはんをんのれいぎうあらはれ、ふだらくさんとも申つべし。かすみのそこにはほつけどくじゆのこゑきこえ、りやうじゆせんともいひつべし。くはんわのなつのころ、くはんのほうわう十ぜんのくらゐをのがれさせ給ひて、九ぼんのじやうせつをおこなはれし御あんじつのきうせきも、むかしをしのぶばかりにて、おひ木のさくらのみぞのこりける。なちごりのうちに、三ゐの中將をみやこにてよく見しりたるそのありけるが、いとをしやこれなりつるしゆぎやうじやを、いかなる人やらんとおもひたれば、小松の三ゐの中じやうどのにておはしけるぞや。あのとのゝ事ぞかし。あんげんのみがに、そのころ十八か九かにて、さくらをかざひてせいがいはをまはれしに、たうけにもたけにも、見めよきてん上人にゑらばれてかいしるにたち給へる、はしもとにはくはんばくいげの大じんくぎやう、おほくつき給ひし中にも、ちゝの大しやうにてちやくせられたりしかば、人又ならぶべしとも見えざつし物を。あらしににほふ花のす(が)た、風にひるがへるまひのそで、天をてらしちをかゝやかすほどなりき。あはや大じんの大しやうたゞいままかけ給ふ人よとて、われも人も申せしに、うつればかはる世のならひこそかなしけれとて、なみだにむせびければ、かたへのそうどもゝ、みなそでをぞしぼりける。みつの御山ことゆへなくとげ給へば、はまのみやの御まへより一ようのふねをさしだして、ばんりのなみにぞうかび給ふ。おきのこじまにまつありけるところにあがりて、大きなまつそばをけづりて、なく／＼なをぞかゝれける。そぶ六はらのにうだう、さきの大じやう大じんたひらのあそんきよもりこう、ほ

うみやうじやうかい、しんぷこまつのない大じんしげもりこう、ほうみやうじやうれん、その
こ三ゐの中將これもり、ほうみやうじやうゑん、廿七にてはまのみやの御まへにてじすいをは
んとかきつけて、又ふねにのり、うみにぞうかび給ひける。うたに、

むまれては—この歌、
覺一本なし。

むまれてはつゐにしにてふ事のみぞさだめなきよのさだめあるかな

ころは三月廿八日の事なりければ、はるもすでにくれなんとす。かいろはるかにかすみわたり
て、あはれをもよをすたぐひなり。おきのつりぶね、うきぬしづみぬ、なみのそこに入やうに
見ゆるもあり、みなわがみのうへとやおもはれけん、きがんと井にをとづれゆくをき、給ふ
にも、こきやうにことづてせまほしく、そぶがここのうらみまで、おもひのこせるかたぞな
き。三ゐの中じやうにしにむかひてをあはせ、かうじやうにねんぶつをとなへ給ふが、ねんぶ
つをとどめ、たきぐちにうだうにの給ひけるは、あはれ人の身にもつまじきものはさいしにて
ありけるぞ。たゞいまもなをおもひいづるぞとよ。おもふ事心にとゞむればつまふかゝらんな
れば、ざんげするなりとの給ひもあえず、はらゝとぞなかれける。たきぐちにう道申ける
は、さん候。たつときもいやしきも、おんあいのみちはちからにをよばず、中にもふうふは一
夜のちぎりし給ふも、みな五百しやうのしゆくゑんとこそ申候へ。しやうじやひつめつ、ゑし
やちやうりはうきよのならひにて候へば、たとひちそくこそ候共、をくれさきだつ御わかれは
なくてしもや候べき。しかればだい六天のまわうは、よくかいをわがものとりやうじて、此う
ちのしゆじやうのしやうじをはなるゝ事をおしみ、もろゝのはうべんをめぐらし、さまたげ

御せんぞ以下四行、
寛一本なし。

みだによらい以下三
行、寛一本と異なる。寛
一本は詳しい。

んとするを、三ぜのしよぶつは一さいしゆじやうをこのごとくおぼしめして、ごくらくじや
(う)どふたいのちにすゝめいれんとし給ふに、さいしといふものがしやうじのきづなどなるに
よつて、ほとけ大きにいましめ給ふこれなり。源氏のせんぞいよにうだうよりよしは、さだた
うむねたうをほろぼせしとき、十二ねんのあひだ人のくびをきる事一まん六千人、そのほかさ
んやのけだもの、がうがのうろくづ、そのいのちをたつ事いく千ばんといふ事をしらず。され
ども一どぼだいしんをおこすによつて、つみにわうじやうする事をえたりき。御せんぞへいし
やうぐんは、まさかどをほろぼし、八かこくをうちしたがへ給ひしよりこのかた、だい／＼て
うかの御かたためにて、九だいにあたり給へば、きみこそ日ばんこくのしやうぐんにてわたらせ
給ふべけれ共、御うんつきさせ給ひぬれば、ちからをよばず。されどもしゆつけのくどくはば
くだいなれば、ぜんぜのざいぐうもめつし給ひぬらん。百千ざい百らかんをくやうするといふ
とも、一日しゆつけのくどくにはをよばじとこそ申候へ。たとひ人ありて七ばうのたうばをた
てゝ、三十三天にいたるといふとも、一日しゆつけのくどくにはをよばじとこそ申候へ。一し
しゆつけすればきうぞく天にしやうずとこそ申ぬれ。つみふかきよりよしさへ心たけきによつ
て、わうじやうのそくはいをとぐる。いはんやさせるざいぐうましますさず、なじかはきみじや
うどへむかはせ給はざらん。みだによらいは十あく五ぎやくをもみちびかんとひぐはんしま
す。かのひぐはんのちからにじうぜんには、うたがひやは候べき。二十五のぼさつはぎがくか
ゑいして、ほつしやうのみとをひらき、たゞいまむかひ給ふべし。いまこそさうかいのそこに

しづまんとおぼしめし候とも、つゝめにはしうんのうへにこそそのぼらせ給はんずれ。じやうぶつとくどうして、さとりをひらき給て、しやばせかいのこきやうへかへりて、さがたかりし人をもいんだろし、こひしき人をもむかへ給はん事、ほどをふるべからず。ゆめ／＼よねんわたらせ給ふなどて、しきりにしやうごうちならしつゝ、ねんぶつをすゝめたてまつる。三ゐの中じやうたちまちにまうねんをひるがへし、ねんぶつす百べんとなへつゝ、つゝめにうみにぞいり給ふ。よ三びやう衛、いしどう丸、二人のにうだうともにつゞめて入にけり。とねりたけさともこれを見て、かなしみのあまりにたえず、つゞめてうみにいらんとす。たきぐちにうだうこれを見て、いかになんぢは御ゆいげんをばちがへたてまつるぞ。下らうこそおもへばくちおしけれとて、なく／＼とりとゞめければ、ふなぞこにたふれふし、なきさけぶ事なのめならず。

ものによく／＼たふれば、むかししつだたいしだんどくせんにいらせ給ひしとき、しやのくとねりこんでいこまを給りて、わうぐうへかへりけんかなしさも、かくやとおぼえてあはれなり。ひじりもあまりのかなしさに、すみぞめのそでをぞしほりける。もしやうきもあがり給ふと見けれども、日もいりあひになるまで、つゝめにうきあがらせ給はず、かいじやうもしだいにくらふなれば、なごりはおしけれども、さてもあるべきならねば、むなしきふねをなく／＼なきさにこぎかへす。さほのしづく、おつるなみだ、いづれもわきて見えざりけり。たけさどやしまへまいりて、しん三ゐの中じやういげの人々に、此よしを申せば、おとゞにをくれまいらせてのちは、たかき山ふかきうみともたのみたてまつりてこそありつるに、さやうになり給

ひけん事のかなしきよとて、なきかなしみ給ひけり。おほいどのも二みどのもこれをきゝ給ひて、いけの大なごんのやうに、ふたごゝゝありてみやこのかたへのぼり給ふかとおもひたれば、さはなくてこそとて、なみだをながしあはれけり。

(いけの大なごんくはんとくだり)

しゆとくめん 同三日
しゆとくめん 一本

おなじく四月一日かまくらさきのうひやうゑのすけよりとも、正四あ下にじよす。もとはじゆ五あ下なりしが五かいをこえ給ふこそめでたけれ。しゆとくめんをかみにあがめたてまつる。むかしはうげんのときかつせんありしおほいのみかどのすゑにこそやしろをつくり、みやうつりあり。かものまつりのいぜんなれども、ほうわうの御はからひにてうちにはしられず。そのころいけの大なごんよりもりくはんとくだられべきよし申されければ、大なごんくはんとくへこそくだられけれ。そのさぶらひにやへいびやう衛むねきよといふものあり。しきりにいとま申てとゞまるあひだ、大なごん、なにとてなんぢははるかたびにおもむくに見をくらじとするぞとの給へば、やへいびやう衛申けるは、さん候。せんぢやうへだにおもむき給はゞ、まつさきかくべく候が、まいらずともくるしふも候まじ。きみこそかうてわたらせ給へ共、さいこくにおはしますきんだちの御事ぞんち候へば、あまりにいとをしくおもひまいらせ候。ひやう衛のすけ殿をむねきよがあづかり申て候ひしとき、ずいぶんつねはなさけありて、はうしをしたてまつりし事よも御わすれ候はじ。こいけどのゝしさいを申なだめさせ給ひて、

いづの國へながされ給ひしとき、おほせにてあふみのしのはらまでうちをくりたてまつりし事、つねはの給ひいだされ候なる、くだり候はゞ、さだめてきやうおうし、ひきで物せられ候はんずらん。さりながら此世はいくばくならず、さいこくにわたらせ給ふきんだち、又さぶらひどもがかへりうけ給はらん事はづかしふおぼえ候と申せば、大なごん、なにとてさらばみやこにとゞまりしとき、さは申さゞるぞとの給へば、きみのかうてわたらせ給ふをあしゝ申にはあらず。ひやうゑのすけもかひなきいのちいき給ひてこそ、かゝる世にもあはれ候へとしきりにいとま申てとゞまるあひだ、大なごんちからをよび給はで、四月廿日くはんとうへこそくだられけれ。ひやうゑのすけ、大なごんにたいめんし給ひて、なにとてむねきよはきたり候はぬやらんとの給へば、むねきよはこんどはいたはる事候ひてくだり候はずとの給へば、ひやうゑのすけどのよにもほゐなげにて、むかしかれがもとにあづけられ候ひしとき、なざけあるはうしんの候ひし事、いつわすれつともおぼえず。さだめて御ともにくだり候はんずらむとこひしく心まち候ひしに、あはれ此ものはいしゆの候にこそとの給ひけり。しよちたばんとて、くだしふみどもあまたなしをかれ、だいまやうせうみやうむまどもひかんとて、よういしたりけれども、くだらざりければ、人々けんじんだてとぞおもはれる。大なごんもとぢぎやうし給ふしやうゑんしりやう、一しよもあひちがあるまじきよし申されけるうへに、しよりやうどもあまたまはられ、六月六日みやこへかへり給ふ。大みやうせうみやうわれをとらじと、めんゝにもてなしたてまつる。くらをきむまだにも五百びきにをよべり。いのちいきてのぼり

さるほどに——この前に、
寛一本 三日平氏の事
あり

こせつ——は誤りか。

給へるのみならず、ゆゝしかりける事どもなり。さるほどに大かくじにかくれぬ給へるこまつ
の三ゐの中將のきたのかたは、風のたよりのことづてもたえてひさしくなりにけり。月に一ど
はかならずをとづれし物を、いまはひの中へもいり、みづのそこにもしづみて、此世になき人
やらんとおもへる心ぞひまもなき。ある女ばう大かくじにきたりて申けるは、三ゐの中將殿こ
そ、たうじはやしまにもぬさせ給ひ候はずなれと申せば、さればこそよはあやしかりつる物を
とて、いそぎ人をくだされたれども、やがてもたちかへらず。なつもたけ、六月のすゑにぞか
へりまいりたる。きたのかた、まづいかにととひ給へば、さ候へばこそ、すぎにし三月十五日の
あかつき、しのびつゝやしまのたちを御いで候て、かうやにて御しゆつけあり。そのゝちくま
のへまいらせ給ひて、みつの御山にさんけいあつて、こせつの事よく／＼申させ給ひてのち、
はまのみやの御まへにて、御身をなげさせ給ひ候なり。たけさとはわがはてを見つるものなら
ば、みやこへのぼれとおもへども、たゞやしまへまいれとおもふぞ。そのゆへは、みやこにて
此世になき物と申ならば、やがて御さまをかへさせ給はんも御いたはしければ、やしまにま
いれと御ゆいごんにて候ひけりと申て、たうじはやしまに候と申ければ、きゝもあへ給はず、
ひきかづきてぞふし給ふ。わかぎみもひめ君も、ふしたはれてぞなき給ふ。わかぎみのめのと
の女ばうきたのかたに申けるは、さ候へども、ほん三ゐの中じやうのやうにいけどられて、京
かまくらひきしろはれて、うきなをながさせ給はんより、かうやにて御しゆつけあつて、くまの
へまいらせ給ひて、こせの事きせい申させ、御身をなげさせまします事、これは御なげきの申

のよろこびなり。いまはいかにおぼしめすともかなはせ給ふまじ。たゞ御さまをかへさせ給ひて、かのごせをとぶらひまいらせさせ給はめと申ければ、きたのかた、げにもとて、なく／＼さまをかへて、かのごせをぞとぶらひ給ひける。ひやう術のすけ、これをつたへきいて、よりともをこいけのにこう申なだめられしつかひをば、こまつどのこそわがみひとつの大じとおもひてなげき給ひしか。そのほうこうを思へば、しそんまでもおろそかにおもはず。これもりもへだてなし。よりともをたのみておはしたりせば、いのちばかりはたすけんずる物をとぞの給ひける。そのころ平家ついばつのためにあらて二まんよきみやこへさしのぼせらる。そのうへちんぜいよりきくち、はらだ、まつらたう、五百よそうのふねにのりて、やしまへよするともきこえたり。これをきゝかれをきくにつけても、心をまよはし、たましみをけすよりほかの事ぞなき。さるほどに七月廿五日にもなりぬ。こそこのけふはみやこをいでしぞかし。あさましふあはたゞしかりし事どもおもひいだし、かたりいだし、なきぬわらひぬせられけり。同廿八日みやこにはしんてい御そくぬ大ごくでんにてあるべかりしを、こ三四のあんのゑんきうのかれいにまかすべしとて、大じやうくはんのちやうにておこなはれ、しんじほうけんないしどころなくして、御そくぬのれい、じんむ天わうより八十二だい、これはじめとぞうけ給る。同八月六日がまのくはんじやのりより、みかはのかみになる。九郎よしつねさへもののじうになる。すなはちせんじをかふむつて、九郎はうぐはんとぞ申ける。そのころかいげんあつて、げんりやくとがうす。やう／＼あきもなかばになりぬれば、月すさまじく、おぎのうは風身にし

み、はぎのしたつゆよなくしげし。いなばうちそよぎ、うらむるむしのこゑ、木のはかつちる、さらぬだにふけゆくあきのそらはかなしきに、平家の人々の心のうちをしはかられてあはれなり。むかしはこゝのえのうちにして、はるのはなをもてあそび、いまはやしまのいそにて、あきの月をかなしめり。みやこにこよひいかなるらんとおもひやる心をすまし、なみだをながしてぞつらねける。ゆきもり、

きみすめばこゝもくも井の月なればなをこひしきはみやこなりけり
(ど)

(ふちと)

わたのこ太郎以下、
人名、第一本は詳細で
ある。

同九月十二日みかはのかみのりより、平家ついばつのためにさんやうだうへはつかうす。あひしたがふ人々には、あしかゞのくらんどよしかね、ほうちうの四郎ときまさ、さぶらひ大しやうには、とひの二郎さねひら、そのこや太郎とをひら、わたのこ太郎よしもり、さうらの十郎よしつら、さゝき三郎もりつな、ひきのとう四郎よしかず、大のゝとう四郎とをかけ、一ぼうばうしやうげん、とさばうしやうそんをさきとして、つがうそのせい三まんよき、みやこをたつて、はりまの國へはせくだり、むろ山にちんをとる。さるほどにこまつの三ゐの中將すけもり、同せうしやう、たんごのじう、さぶらひ大しやうには、ひだの三郎ざへもんかげつね、ゑつ中の次郎ひやう衛もりつぐ、かづさの五郎びやうゑたゞみつ、あく七びやう衛かげきよをさきとして、五百よそうのふねにのり、びぜんの國こじまにつくときこえしかば、源氏三まん

三夜―五日、一本、覺
一本。

よき、はりまのむろ山をたつて、びぜんのふちとへぞよせたりける。源平りやうばううみのあはひ五ちやうあまりをへだてたり。ふねなくしてはたやすくわたるべきやうもなし。ふねはあれども平家がたにてんじをきたれば、源氏がたにふねなしと見て、平家がたよりはやりをの共、せうせんにのりてをしうかべ、あふぎをあげて、げんじこゝをわたせとぞまねきける。されどもふねなければわたるにをよばず。むなしく日かずををくるほどに、同廿三夜のようにりて、さゝきの三郎もりつな、此うらのとをみするよしにて、うら人のおとなしきものをかたらひて、やとの、こゝをわたさんとおもふはいかに。むまにてわたすべきところはなきかとへば、あんないしらせ給はであしふ候ひなんと申。そのときさゝきの三郎、こそでとかたなをとらせて、しらぬ事はよもあらじ、をしえよといひければ、たとへばかはのせのやうなるところこそ候へ。此せがふちやうにして、月がしらにはひがしに候。月じりにはにしに候。むまのあしのをよばぬところは三だんにはよもすぎじと申。うれしき事をきゝつるものかなとおもひて、いゑのこ、らうどうにもしらせず、人ひとりもぐせず、はだかになりて、此おとこをさきにたて、わたりて見れば、げにもいたふふかふはなかりけり。こしひざわきにたつところもあり、びんのひたるところもあり。さきはしだいにあさくなりければ、てきちんやさきをそろへてまつところに、はだかにてはかなはせ給はじ。かへらせ給へと申せば、さゝきの三郎それよりかへりぬ。ゆきわかれけるが、さゝきの三郎、きやつ又人にあんないもやしえんずらんとおもへば、やとの、いふべき事ありとてよびかへし、ものいふやうにてとつてをさへ、くびかきき

四日十六日、一本、覚
一本、
かしこくずりくろい
とおどし一本、覚一本、

つてすて、けり。同廿四日たつのこくばかりに、平家がたよりあふぎをあげ、源氏こゝをよせ
とまねきたるに、さゝきの三郎、これを見て、しげめゆひのひたゝれに、かしこくずりのよろ
ひきて、しろあしげなるむまにのり、いゑのこらうどう七き、むまのはなをならべてうちいれ
てぞわたりける。大しやうぐんみかはのかみこれを見給ひて、あなさゝきはものにつめてくる
ふか。あれせいせよとゞめよとの給へば、とひの二郎むまにうちのかつて、やとの、さゝきど
の、大しやうの御ゆるしもなきに、とゞまれといひけれども、みゝにもきゝいれず、たゞわた
しにわたすあひだ、せいしかねてとひの二郎もつゝゐてわたす。くらづめにたつところもあ
り。くらづめこゆるところもあり。ふかきところはおよがせて、あさきところにうちあぐる。

みかはのかみこれを見て、こはいかに、あさかりけるぞ。わたせとて、三まんよきうちいれて
ぞわたりける。平家これを見て、あはや源氏のせいわたすはとて、われさきにふねにのりをし
うかべて、やさきをそろへてさんゝにゐる。源氏はかぶとのしころをかたぶけて、平家のふ
ねにのりうつりゝゝ、ひのいづるほどにぞたゝかひける。源氏のつはものに、わみの八郎ゆき
しげとなつて、平家のつはものさぬきの國のちう人、かべのげんじとひつくんで、うへにな
りしたになりころびあふところに、かべのげんじがらうどういできたり、わみの八郎をみかた
なさしてくびをとる。わみの八郎がいとこにこ（ば）やしの三郎しげたかとなつて、かべと
くみ、やがてうみへぞ入にける。こばやしがらうどうに、くろだの源太といふものあり。しう
をうしなふて、あなたこなた、見まはすところに、みづのあはだつところあり。くまでをふ

りたてければ、ものむずととりつゐたり。ひきあげて見ければ、かたきなり。しうはかたきがこしにいだきつきてぞあがりたる。しうをふねにひきのせて、いきをつかせ、かたきをば、やがていそにをしつけてくびをかく。たつのこくにやあはせして一日たゝかひくらし、夜にいらて、平家かなはじとやおもひけん、われさきにとふねにのりをしうかべ、四こくのちにわたさんとす。源氏つゝゐてせめけれども、ふねなければ、ちからをよばず。こじまのちにうちあげて馬のいきをぞやすめける。むかしよりかはをわたすいくさはあれども、うみをわたす事はこれがはじめとぞうけたまはる。かまくらどの、びぜんのこじまをさゝきの三郎にぞ給りける。みげうしよには、天ちくしんだんはしらず、わがてうにむかしよりかはをわたすれいはあれども、うみをわたす事なし。きだいのためしなりとあそばしてぞ給りける。同廿五日みやこには、九郎はうぐはん五ゐになる。大夫のはうぐはんとぞ申ける。さるほどに十月にもなりぬ。大じやうゑおこなはるべしとぞきこえける。やしまにはうらふく風もはげしく、いそうつなみもたかければ、つはものもせめきたらず、あきんどのほかうもまれなり。みやこのをとづれもきかまほしく、いつしかそらかきくもりあらうちちる。平家の人々はこれにつけても、いとゞきゑいる心ちぞせられける。都には大じやうゑおこなはるべしとて、御けいのぎやうがうあり。せつげにはとく大じのない大じんさねさだこうきんぜらる。きよくねんせんていのぎよけいのぎやうがうには、平家のない大じんつとめ給ひて、せつげのあくやにつきて、まへにはたうのはたをたてゝをき給ひたりしけしき、ゆゝしかりし事なり。三ゐの中將いげみなはに候

はれしに、又人ならぶべしとも見えざつし物を。けふは九郎はうぐはんせんちんにぐぶす。木
そなどにはにず、ことのほか京なれたりしかども、平家にはにもにずをとりたり。おしうや
うわよりこのかた、にんみん百しやうら、あるひは源氏にほろぼされ、あるひは平家になやま
され、かゑんをすてゝさんりんにまじはりしかば、はるはどうさくのおもひをわすれ、あきは
さいしゆのいとなみにをよばず。さればいかゞしてかやうの大れいをおこなはるべきなれど
も、(さてしも)あるべき事ならねば、かたのごとくおこなはる。源氏やがてつゝゐてせめば、
平家はそのとしみなほろぶべかりしに、大しやうぐん、むろ山たかさごへんにやすらふて、ゆ
うくんゆうちよどもよびあつめ、あそびたはぶれ(の)のみにして、月日ををくり給ひけり。大みや
うせうみやうおほかりしかども、大しやうにげちにしたがふ事なれば、ちからにをよばず。た
ゞ国のつゑえ、たみのわづらひのみありて、ことしもくれなんとす。げんりやくも二年になり
にけり。

平家卷第十一

三九〇

第一百一句 やしま……………三九二

わたなべふくしまふなぞちへ

さかろのちん

かつうらのちん

つきのぶさいご

第一百二句 あふぎのまと……………四〇一

よ一二のやのかうみやう

みをのやのいくさ

ゆみながし

むれたかまつのちん

第一百三句 ざんげんかちはら……………四〇六

いせの三郎のりよいいけどる事

たなべのたんそう源氏にまいる事

すみよしかぶらそうもんの事

かまのくはんじやと九郎はうぐはんと

ひとつになる事

第一百四句 だんのうら……………四一〇

とをやのさた

源氏のふねのうちにしらはたきたる事

あはのみんなの心がはり

はるのぶおんやうじことはざの事

第一百五句 はやとも……………四一五

せてい二ぬ殿御さいご

おほいどのいげとらはるゝ事

ひだの三郎ざへもんの事

のと殿さいご

第一百六句 平家一もんおほぢわたし……………四二〇

いけどりのしゆみやこいり

うしかひ三郎丸の事

よりとも二ぬにじよせらるゝ事

平大なごんのむこよしつねの事

第百七句 つるぎのまき上……………四二七

天ちかいびやく

そさのお大じやをきらるゝ事

くさなぎのおこり

あつたのおこり

第百八句 つるぎのまき下……………四三二

わたなべの源四郎つなおにきる事

あべのさだたうむねたうせいはいの事

ともきりのおこり

そが夜うちの事

第百九句 かゞみのさた……………四四〇

あまのいはとの事

きいの國日ぜんさうのおこり

ないしどころゑんじやうのがれ給ふ事

しんじのさた

第百十句 ふくしやう……………四四五

おほいどのふくしやうげんざんの事

おほいどのくはんとどう下かう

ふくしやうきらるゝ事

めのとの女ばう身なぐる事

平家卷第十一

三九二

(やしま)

げんりやく二年正月十日、九郎太夫のはうぐはん、みんの御しよへまいり、大くらきやうやすつねのあそんをもつて申されけるは、平家はしゆくほうつきて、しんめいにもはなれたてまつり、きみにもすてられまいらせて、なみのうへにたゞよおち人となれり。しかるを、此二三がねんせめおとさずして、おほくのくにぐをふさげつるこそくちおしふ候へ。こんどよしつねにをひては、きかいかうらいでんちくしんだんまでも、平家のあらんかぎりはせむべきよしをぞ申されける。みんの御所をいで、くにぐのつはものにむかつて、かまくら殿の御だいくはんとして、ちよくせんをうけたまはつて、平家ついたうにまかりむかふ。くがはこまのあしのかよはんほど、うみはろかいのたゝんかぎりはせむべきなり。いのちをおしみ、さいしをかなしまん人は、これよりかまくらへくだられべしとぞの給ひける。やしまには、ひまなくこまのあしはやめ、^(み)正月もたち、二月にもなりぬ。はるのくさかれては、あきの風におどろき、あき風やんでは、はるのくさになれり。をくりむかへて三とせにもなりぬ。しかるをとうごくのつはもの共、せめきたるときこえしかば、なんによのきんだちさしあつまつて、なくよりほかの事ぞなき。同二月十三日、都には廿二しやのくはんべいあり。これは三じゆのじんぎことゆへなくみやこへかへしいれ給へとの御きねんのためとぞおぼえたる。同十四日、みかはのか

みのりより、平家ついたうのために七百よそうのふねにのつて、つの國かんざきよりさんやうだうをはつかうす。九郎大夫はうぐはん二百よそうのふねにのりて、とうごくわたなべよりなにかいだうへおもむく。同十六日、うのこくわたなべかんざきにて、ひごろそろへたるふねのともづな、けふぞとく。風こぼくをおつてふくあひだ、なみほうらいのごとくふきて、ふねをいだすにをよばず。あまつさへ、大せんどもたゝきやぶられて、しゆりのためにその日はとゞまる。わたなべに大みやうせうみやうよりあひて、さてふないくさのやういはなにとあるべきと、ひやうちやうあり。かぢはら申けるは、ふねにさかろをたて候はばやと申せば、はうぐはん、さかろとはいかなる物にて候やらんとの給へば、かぢはら、さん候、むまはかけんとおもへばかけ、ひかんとおもへば、ゆんでへもめてへもまはしやすき物にて候。ふねはきつとをしなをす事やすからぬ物にて候へば、ともにもへにもかぢをたてて、さうにろをたてならべて、ともへもへもをさせばやとぞ申ける。はうぐはんどの、いくさのならひは、一ひきもひかじとやくそくしたるだにも、あはひあしければ、かたきにうしろを見るならひあり。かねてよりにげしたくをしては、なじかはよかるべき。人のふねにはさかろもたてよ、かへさまろもたてよ、よしつねがふねにはたてべからずとぞの給ひける。かぢはら、あまりに大しやうぐんのかくべきところ、ひくべきところをしらせ給はぬは、あのしゝむしやと申て、わろき事にて候物をと申せば、よしゝよしつねはあのしゝ、かのしゝはしらず、かたきをばたゝひたせめにせめて、かちたるぞ心ちよふはおぼゆるぞとの給へば、かぢはら、てんせい此とにつきてい

くさせじとぞつぶやきける。夜にいりてはうぐはんふね共せうくあらため、一しゆものせよや、わかたうとて、いとなむていにて、物のぐどもはこぼせ、むまじものせて、ふねいだせとのたまへば、かちとりども、風はしづまりて候へ共、おきはなをつよふぞ候らん。かなふまじきよしを申。はうぐはんいかつて、ちよくせんをうけ給はり、かまくらどの、御だいくほんとして、平家ついたうにまかりむかふよしつねが下ちをそむくをのれらこそ、てうてきよ。野山のすゑ、うみかはにてしするも、みなせんぐうのしよかんなり。そのぎならば、やつばらいちくくにいころせとぞの給ひける。あふしうのさとう三郎びやう衛、四郎びやう衛、むさしばうべんけいなんど申もの共、かたてやはげて、御ちやうにてあるに、まことにふねをいだすまじきかとて、むかひければ、やにあたつてしなん身もおなじ事、風つよくははせじに、しねやとて、二百よそのふねのうちに、たゞ五そうをぞいだしける。五そうのふねは、はうぐはんのふね、たしろのくはんじやのぶつながふね、ごとうびやうゑさねもとがふね、あうしうのさとう三郎びやう衛きやうだいがふね、よどのかうないたゞとしはふねのぶぎやうたり。のこりのふねは風におそれていず。此風には見えねども、夜のうちに四こくのちにつかんとおぼゆるぞ。ふねどもかゞりたきて、かたきにふなかず見すな。よしつねがふねをもとぶねにして、かゞりをまぼれとて、とりかちおもかちにはせならべてゆくほどに、あまりにつよきときは、大づなをおろしてひかせけり。十六日のうしのこくにわたなべふくしまをいで、をすには三日にわたるところを、たゞ三ときに、十七日のうのこくに、あはのかつらにつきにけり。夜のほの

ぐとあけるに、なぎさのかたを見わたしければ、あかはたさしあげたり。はうぐはんの給ひけるは、あはやわれらがまうけしてんげり。ふねどもひらづけにつけて、かたきのまとなしていさすな。なぎさちかふならば、むまどもうみへをひいれ、ふなばたにひつつけくおよがせて、むまのあしたつほどにならば、うちのりかけよとて、なぎさ三ちやうばかりになりければ、ふなばたふみかたぶけ、むまどもうみへをひいれ、ひきつけおよがせて、むまのあしたつほどになりしかば、ひたくとうちのりくおめきさけびてかく。かたきも五十きばかりありけるが、これを見て、ざつとひくに、二ちやうばかりぞにげたりける。はうぐはんしぼしひかへて、むまをやすめ、いせの三郎よしもりをめして、きやつばらはけしかるものところ見れ。あのなかにしかるべきものあらん。めしてまいれとの給へば、よしもりたゞ一き、五十きばかりひかへたるかたきのなかにかけいれて、なにとかゑしやくしたりけん、よはひ四十きかりのおとこの、くろかはおどしのよろひき、かげなるむまにのりたるむしや一き、かぶとをぬがせ、ゆみをはづさせて、のつたるむまをば下人にひかせぐしてまいる。はうぐはん、これはなにものぞとひ給へば、たうごくのちう人、ばんざいのこんどう六ちかいと申ものにて候。なにいゑにてもあれ、物の具なぬがせそ。やしまのあんないしやにぐしてゆけ。めばしはなつな。にげてゆかばいころせとぞの給ひける。此ところはなにといふぞとの給へば、これはかつらと申候、かつうらとかひて候を、下らう共が申やすきまゝにこそ、かつらとは申候へ。はうぐはん、これきゝ給へ。とのばら。いくさしにきたるよしつねが、まづかつうらにつくめ

でたさよ。さていかにやしまにはせいはいかほどあるぞ。千きばかりは候らん。などすくなきぞとの給へば、あはのみんなちやくし、でんないさゑもんりよし、三千よきにて、かはのをせめに、いよの國へわたつて候。それせいのむかはぬうら／＼も候はず。五十き百きづゝさしむけられ候。さてこれに平家のかたうとしつべきものはなきか。さん候、のりよしがおと／＼、さくらばのよしとをと申ものこそ候へ。さくらばよしとをうつていくさかみにまつれやとて、さくらばがじやうへぞをしよせたりける。さくらばのすけ、しばした／＼かひ、くきやうのむまをもちたりければ、そばのぬまよりおちにけり。ところのもの共廿よ人がくびをきり、よろこびのときをつくり、いくさかみにぞまつられける。はうぐはん、こんどう六をめして、これよりやしまへはいかほどあるぞ。二日ち候。さらばかたきのしらぬさきによせよやとて、かけあしになり、あゆませゆくほどに、その日はあはの國ばんどうばんざいゆきすぎて、あはとさぬきとのさかひなる、おほさかごえといふところにうちくだつて、いるの、しらとり、たかまつがさとをうちすぎ／＼よせ給ふに、山なかにて、みのかさをふたるおとこ一人ゆきつれたり。どこのものぞとはせられければ、京のものにて候と申。どこへゆくぞ。やしまへまいり候。やしまへほどの御かた（へ）まいるぞ。女ばうの御つかひに、みやこよりおはい殿の御かたへまいり候。これもあはの御け人にてあるが、やしまへめされてまいるなり。此みちはふちあんないなるに、わどのあんないしやつかまつれ。これはあんないはいしりて候と申。なに事の御つかひぞとへば、下らうは御つかひつかまつるばかりにてこそ候へ。いかで

かなに事とはしり候べきと申。げにもとて、ほしめくはせなんどして、さるにてもなに事の御つかひとかきゝし。べちのしさいや候べき。かはじりにげんしどもおほくうかんで候とかや申され候ござんなれ。さぞあらん。そのふみとれとて、うばひとりて、しやつしあればとて、しばつてみちのほとりなる木にゆひつけてぞとをられける。はうぐはん此ふみ見給へば、まことにも女ぼうのふみとおほしくて、九郎はすゝどきおとこにて、大風大なみたつともよもきらひ候はじ、せいをちらさで、よくく御ようい候へとぞかゝれたる。これはよしつねに天のあたへ給へるふみなり。かまくらどのに見せたてまつらんとて、ふかくおさめてをき給ふ。こんどう六をめして、さてやしまのじやうはいかにとの給へば、さん候。しろしめさねばこそ候へ。じやうはむげにあさまに候。しほのひ候ときは、むまのはらもつからず候と申。さらばよせよとて、源氏のせい、しほひのかたよりよせけるに、ころは二月十八日の事なれば、けあげたるしほのしぐらうたるうちより、うちむれてよせければ、平家はうんやつきぬらん、大ぜいとこそ見てんげれ。あはのみんながちやくし、でんないぎゑもん、かはのをせめに、いよの國にこえたりけるが、かはのはうちもらし、いゑのこらうどう百よ人がくびをとり、わが身はいよにありながら、さきだてやしまへたてまつりたりけるが、おりふしおほいどの、御しゆくしよにて、じつけんあり。つはもの共、こはいかにじうまうなんど、さはぎけるが、よくく見てさではなし。あはやかたきのよせ候ぞやと申ほどこそあれ、しらはたざつとさしあげたり。すでにけんじさだめて大ぜいにてぞ候らん。いそぎ御ふねにめさるべしとて、なぎさにあげをきた

るふねどもにはかにおろしけり。御しよの御ふねには、女あん、きたのまんどころ、二め殿い
げ、女ばうたちめされけり。おほいどのふしは、ひとつふねにぞのり給ふ。平大なごん、平中
なごん、しゆりの大夫、しん中なごんいげの人々、みなふねにとりのつて、一ちやうばかりを
しいだしたるところに、しろじるしつけたるむしや六き、そうものまへにあゆませていでき
たる。まつさきにすゝんだるぞ、大しやうとは見えたる。あかぢのにしきのひたゝれに、むら
さきすそのよろひきて、こがねづくりのたちはき、きりもんのやをひ、ぬりごめどうのゆみ
のまんなかとつて、くろむまのふとうたくましきに、きんぶくりんのくらをひてぞのつたりけ
る。あぶみふんばり、つたちあがりて、一ゐんの御つかひ、太夫はうぐはんよしつねぞや。わ
れとおもはんものはすすみいでよ。げんざんせんとぞなのりける。こはいかに。大しやうぐん
にてありけるぞ。いとれやいとれとて、さしやにゐるふねもあり、とをやにゐるもあり。つゞ
ゐてなのるは、たしろのくはんじやのぶつな、かねこの十郎いゑたゞ、同よ一ちかのり、いせ
の三郎よりもり、ごとうびやう衛さねもとなり。源氏は五き三きづゝ、うちむれゝよせけ
り。さとう三郎びやう衛つぎのぶ、同四郎びやう衛たゞのぶ、しぶやのうまのじうしげすけ、
これ三人は、いくさをばせで、あはのみんなぶが此三がねんがあひだ、やうゝにしてつくりた
るだいたりや御しよにひをかけて、へんじのけふりとなしにけり。おほいどのこれを見給ひて、
源氏おほくもなかりけるものを。だいたりや御しよをやかせつるこそやすからね。のと殿はおは
せぬか、一いくさし給へとありしかば、のとのせんじ、せうせんのにつてよせらる。つはもの二

百よ人かぶとのをしめて、おなじくなぎさにあがる。ゑつ中の二郎びやう衛すゝみいで、申けるは、こん日の源氏の大しやうぐんはいかなる人ぞよ。いせの三郎申けるは、こともかたじけなや、せいわ天わう十だいの御すゑ、九郎大夫のはうぐはんぞかし。もりつぐ、あざわらつて、それはかねあき人がしよじうござんなれ。へいちにちゝよしともはうたれぬ。はゝときはがはらにいだかれて、やまと山しろにまよひありきしを、こ大じやうにう道どのたづねいださせ給ひしが、おさなければ、ふびんなりとてすてをかれ給ひしほどに、くらまのちごして、十四五までありけるが、あき人のともして、おくにくだりしものにてこそと申ければ、いせの三郎、なんちはとなみ山のいくさにからきいのちをいきて、こつじきの身となり、京へのぼりしはいかにと申。もりつぐ、なんちもすゝか山の山がつよと申けり。かねこの十郎、ぎうごんたがひにゑきなし。申さばいづれかをとるべき。こぞのはる一のかたにゝてむさしさがみのわかとのばらのてなみよく見たるらんと申もはてねば、おとゝのよ一よつびあてている。もりつぐがむないたうらかくほどこにいさせて、そのゝちはことばたゝかひせざりけり。源平みだれあひ、しばしたゝかふ。のと殿のたまひけるは、ふないくさはやうあるぞとて、わざとひた(ゝ)れはき給はず、まきぞめのこそでに、くろいとおどしのよろひき、大なかぐろのや、くびだかにをひなし、しげどうのゆみまつな(ん)かとり、せうせん(ゆ)のへにたつて、けんじの大しやうぐんをいおとさんとぞうかゝひける。のとのせんじはきこふるせ(ゆ)ひびやうの、やさきにかけたてまつらじと、つはもの共、はうぐはんのやおもてにふさがつてぞたゝかひける。のと殿やおもてのや

つばら、そのき候へとて、さしつめひきつめ、さんぐに給ふに、よろひむしや五きいおとさる。はうぐはんあらはになり給ふところに、いつのまにかすゝみけん、さとう三郎びやう衛つぎのぶ、くろかはおどしのよろひきて、はうぐはんのやおもてにむずとへだゝるところを、むないたうしろへあいだされて、むまよりさかさまにおちぬ。のと殿のわらは、きくわう丸とて、しやうねん十八さいになるが、もゑぎおどしのはらまき、かぶとのをしめ、しらえのなぎなたのさやははづし、ふねよりとんでおり、つぎのぶがくびをとらんとよるところを、おとくのたゞのぶよつびゐている。きくわうがはらまきのひきあはせをいられて、いぬみにたはれぬ。かたきにくびをとらせじと、のとのぜんじふねよりとんでおり、きくわうをひつさげて、ふねにのり給ふ。くびをばかたきにとられねども、いたでなればしにけり。さしもふびんにし給ひしきくわうをいさせ、そのゝちはいくさもし給はず、ふねをばおきへをいささる。はうごはんも、てをふたるつぎのぶをちんのうしろへかゝせ、てをとつて、いかにくとの給へば、いきのしたにいまはかうとぞ申ける。はうぐはんなみだをながし給ひて、此世におもひをく事あらば、よしつねにいひをけとの給へば、よにくるしげに申けるは、などかおもひをく事のなくては候べき。まづあふしうに候らうぼの事、さてはきみの御よを見たてまつらず、さきにたちまいらすこそ、めいどのさはりにて候へと、これをさいごのことばにて、廿八と申、二月十八日のとりのこく、さぬきのやしまがいそにてつめにしにけり。はうぐはんかなしみ給ひて、此へんにそうやあるとの給へば、そう一人たづねいだしたり。はうぐはん此

そうにむかつて、たゞいまはつるものゝふがために、きやうをかきとぶらひてたび候へとて、ひぎうのむまをぞひかれける。くらきむまのふとくたくましきに、きんぶくりんのくらをひたり。此むまと申は、一のたにひえどりごえをおとされ、あまりひぎうにおぼしめして、五ぬのじうにならせ給ふとき、五ぬを此むまにゆづるなりとて、太夫くろとなづけらる。かゝるむまをひかれし心ざしのせつなるを見て、此君の御ためにいのちをすてん事、たれかおしみたてまつるべきと、かんるい身にあまり、つはものどもみなよろひのそでをぞぬらしける。

(あふぎのまと)

あはさぬきに平家をそむき、源氏をまちけるもの共、かしこのほら、このたによりはせきたつてくははる。源氏のせいほどなく三百よきにぞなりにける。けふは日くれぬ。しうぶはけつせじ。あすのいくさときだめて、源氏ひきしりぞかんとするところに、おきのかたよりじんじやうにかざりたるせうせん一そう、なぎさによす。いかにと見るところに、あかきはかま、やなぎのみつゝぎぬきたるをんなの、まことにゆうなりけるが、せんちうよりいでゝ、みなくれなぬのあふぎの日いだしたるを、ふなばたにはさみて、くがへむかひてぞまねきける。はうぐはん、ごとうびやう衛をめして、あれはいかにとの給へば、いよとこそ候らめ。たゞしはかりごごごさんなれ。大しやうぐんさだめてすゝみいでゝ、けいせいを御らんせんずらん。そのときてだれをもつていおとさんと候か。あふぎをばいそぎいさせられべうや候らんと申ければ、

いつべきものはなきか。さん候。しもつけの國なすの太郎すけたかがこに、よ一すけむねこそ、こひやうなれどもてはきいて候へ。しうこはあるか。さん候。さん候。かけとりをみよせにふたよせはかならずつかまつると申。さらばめせとて、めされたり。よ一そのころ十八九なり。かちんにあかぢのにしきをもつて、はたそでいろえたるひたゝれに、もえぎにほひのよろひきて、あしじろのたちをはき、なかぐろのやの、その日のいくさにいのこしたるに、うすきりふにたかのははぎませたる、ぬためのかぶらさしそへたり。ふたどころどうのゆみわきばさみ、かぶとをぬひで、たかひばにかけ、御まへにかしこまる。はうぐはん、いかによ一、けいせいのだてたるあふぎのまつな(ん)かいて、人にもけんぶつさせよとの給へば、よ一、これをい候はん事はふちやうに候。いそんじ候ものならば、みかたのながきぎずにて候べし。じよの人にもおほせつけらるべうや候と申せば、はうぐはんいかつて、かまくらをいでゝさいこくへむかはんとのぼらは、よしつねがめいをそむくべからず。それにしさいを申さんとのぼらは、いそぎかまくらへかへりのぼらるべし。そのうへおほくの中より一人あらびいださるゝは、こうだいのみやうがなりとよろこばざるさぶらひはなにのようにかたつべきとぞの給ひける。よ一かさねて申て、あしかりなんと御ぜんをつゐたつて、つきげぶちなるむまにくろくらをきうちのり、なぎさのかたへあゆませければ、つはもの共をつさまにこれを見て、ふりかゝりしづまりて、いちぢやうこのわかものはつかまつらんとおぼえ候と、くちゞに申せば、はうぐはんもよにたのもしくおもはれけり。なぎさよりうちのぞんで見れば、とをかりけり。とをひなれば、む

まのふとばらひたるほどにうちいるれば、いま七八たんばかりと見えたり。おりふし風ふきて、ふねゆりすえゆりあげ、あふぎざしきにもさたまらずひらめきたり。おきには平家一めんにふねをならべてけんぶつす。うしろを見れば、みぎはにみかたの源氏ども、くつばみをならべひかえたり。いづれもはれならずといふ事なし。なを風しづまらざれば、あふぎざしきにもさだまらず。よいかゞすべきやうもなく、しばらく天にあふぎきねん申けるは、なむきみやうちやうらい、みかたをまばらせおはします正(八)まんだぼさつ、べつしてわが國のしんめい、につくはうごんげん、うつのみや、なすのゆぜん大みやうじん、ねがはくはあのあふぎのまつなかいさせてたばせ給へ。これをいそんずるほどならば、ゆみきりおり、うみにしづみ、大りうのけんぞくとなつて、ながくぶしのあたとならんずるなり。ゆみやのなをあげ、いま一どほんごくへむかへんとおぼしめされ候はゞ、あふぎのまつなかいさせて給り候へと、心のうちにきねんして、めをひらき見たりければ、風もすこししづまり、あふぎもいよげにぞなつたりける。こひやうなれば、十三ぞく、かぶらとつてつがひ、しばしたもちてはなつ。ゆみはつよし。うらにひゞくほどになりわたりて、あふぎのかなめよりうへ、一すんばかりをゐてひやうふつといきつたれば、あふぎこらえず、三つにさけ、そらへあがり、風に一もみもまれて、うみへざつとぞちりたりける。みなくれなみのあふぎの日いだしたるが、ゆふ日にかゞやゐて、しらなみのうへにうきぬしづみぬゆられければ、おきには平家ふなばたをたゞゐてかんだり。くがには源氏ゑびらをたゞゐてどよめきけり。あまりおもしろさにかんにたえざるに

や、ふねのうちよりよはひ五十ばかりのおとこの、くろかはおどしのよろひきて、しらえのなぎなたもちたるむしや一人、いできたつて、しばしまふたりけり。いせの三郎、よ一がうしろへあゆませよつて、御ぢやうにてあるぞ。にくひやつばらがいまのまひやうかな。つかまつれといひければ、なかざしとつてつがひ、よつびあてゐる。しやくびのほね、ひやうふつといとをされ、まひたはれにたふれけり。源氏がたいよくかつにのつてぞどよみける。平家のかたにはをともせず。ほゐなしとやおもひけん、せうせん一そうなぎさへよす。なぎなたもちたるもの一人、たてつき一人、ゆみもち一人、ふねのうちよりみぎはにむかつて、源氏がたにわれとおもはんつはものよせよとぞのゝしりける。はうぐはん見給ひて、にくひやつかな。むまつよからんものむかつてけちらせとの給へば、うけたまはつて、すゝむものたれゝぞ。むさしの國のちう人、みをのやの四郎、同十郎、かうづけの國のちう人、にうの四郎、しなのゝ國のちう人、木そのちうたをはじめとして、五きつれてぞかたりける。まつさきにすゝむだるみをのやがむまのむながひづくしを、平家のたてのかげより、はずのかくるゝほどにいこまれて、むまはびやうぶをかへすがごとし。しうはめてのあしをこし、むまのかしらにゆらどとり、やがてたちをぞぬゐたりける。たてのかげより、大なぎなたうちふつていでたりける。あれはなぎなた、われはこだち、かなはじとやおもひけん、かいふしてにげてゆく。をふてなぐかと見れば、いかゞはしたりけん、なぎなたわきにかひはさみ、かぶどのはちをつかまんとす。つかまれじとにげけるが、とりはづしく、四どめにむずとつかみ、しばしたもつて見え

けり。みをのやもつよかりけるやらん、はちつけのいたふつとひきゝつて、みかたのなかへに
げ入、しばらくいきをぞやすめける。かたきやがてもふてもこず、ひききつたるしころをさ
しあげ、平家のさぶらひに、かづさのあく七びやう衛かけきよとなのりすてゝぞかへりける。
はうぐはんこれを見給ひて、あく七びやう衛ならばもらすな、いとれやとて、おめひてかけ給
へば、三百よきつゝめてかく。平家がたにもこれを見て、あく七びやう衛うたすなとて、せう
せん百そうばかりなきさへよす。たてのはをめんどりばにつきむかへて、源氏よせよとまねき
かく。源氏三百よき、むまのひづめをたてならべおめひてかく。みだれあひてしばしたゝか
ふ。平家のつはものみなかちだつたり。たてどもさんぐにかけちらされてひきしりぞくとこ
ろを、源氏はむまのあしのをよぶほどせめたゝかふ。はうぐはんあまりにふかいりし給ふほど
に、ふねのうちよりくまでをいだして、はうぐはんのかぶとにうちかけて、ゑぬごゑをいだし
てひきおとさんとす。みかたのつはものはせよせて、くまでをうちはらひゝたゝかひけり。
はうぐはんゆみをかけおとされて、くらつめひたるほどにうちいれて、むちのさきにてかきよ
せとらんゝとし給へば、しきりにくまでをうちかけけり。くがのもの共、たゞすてゝしりぞ
かせ給へと、めんゝに申けれ共、はうぐはんつゐにとり給ふ。つはもの共、たとひせんきん
まんきんの御とらしなりといふとも、御いのちにはかへさせ給ふべきかと、くちゝに申けれ
は、はうぐはん、まつたくゆみをおしむにあらず、おち八郎ためともがゆみなんとなりせば、
わざともうかべて見すべけれども、わうじやくたるゆみを平家にとつて、これこそ源氏の大し

やうのゆみ、つよひぞよはひぞとあざけられんがくちおしければ、いのちにかへとつた(る)ぞかしとの給へば、みな此ことばをぞかんじける。けふはくれぬ。あすのいくさとさだめて、源氏ひきしりぞき、たうごくむれたかまつにちんをとる。源氏は三日があひだねざりけり。わたなべより三日にわたるところをたゞ三ときにわたりたれば、その夜は大なみにゆられていねず、あくればかつらのいくさして、夜もすがらなかな山こえて、けふは一日たゝかひくらし、みなつかれはてゝ、あるひはかぶとをまくらとし、あるひはよろひのそでをかたしき、ぜんごもしらざうちふしたり。その中にはうぐはんといせの三郎はいねざりけり。はうぐはんはたかきところにあがりてとを見し給へば、よしもりはくぼみにかくれて、かたきよせばとて、かたてやはげてぞましかけたる。そのゝち平家がたよりよせて夜うちにせんと、のと殿大しやうにてひたかぶと五百よきむかひけるが、ゑつ中の二郎びやう衛もりつぐと、みまさかのちう人、江見の次郎もりかたとさきをあらそふあひだに、その夜むなしくあけにけり。夜うちにだにもしたりせば、源氏はその夜ほろぶばかりしを、平家のうんのきはまるところなり。平家もひきしりぞき、たうごくしどのだうちやうにぞこもられける。

(ぎんげんかちはら)

同十九日、はうぐはん、いせの三郎よしもりをめして、あはのみんなりよししがちやくし、でんないざゑもんのりよし、かはのをせめにいよの國へこえたんなるが、これにいくさありとき

しど―次に第一本には
志度合戦の事がある。

ゝて、けふはさだめてはせむかふらん。大ぜいいたてゝはかなふまじ。なんぢゆきむかひ、
よきやうにこしらゑてめしてまいれとの給へば、いせの三郎、さ候はゞ御はたをたまはつて、
むかひ候はんと申。もつともさるべしとて、しらはたをこそ給りけれ。そのせい十六きにてむ
かふが、みなしろしやうぞくなり。つはものどもこれを見て、三千よきが大しやうをしろしや
うぞく十六きにてむかひ、いけどりにせん事ありがたしとぞわらひける。あんのごとく、でん
ないぞゑもん、やしまにいくさありときゝてはせまいる。みちにてよしもりゆきあふたり。し
らはたざつとさしあげければ、あはや源氏よとて、これもあかはたさしあげたり。いせの三
郎、でんないぞゑもんにあゆみよつて申けるは、かつうはきゝ給ひつらん、かま（くら）どの
ゝ御おとゝ九郎大夫のはうぐはんどの、さいこくのうちての大しやうにむかはせ給ひたり。
一さく日御へんのおぢ、さくらばのすけうたれまいらせぬ。きのふやしまによせて、たいりや
御しよどもやきはらひ、一日かつせんの候ひしに、平家の人々かずをつくしてうたれ給ひぬ。
その中にしん中なごん、のと殿ばかりぞよふはおはせし。おほいどのゝふしもいけどりぬ。そ
のほかいけどりどもあまたあり。御へんのちゝ、みんぶのたゆうもかう人にまいられたるを、
よしもりがあづかり申て候。こよひ夜もすがらなげきて、あはれ此のりよしがこのよのありさ
まをしらずして、みやう日まいりかつせんし、うたれまいらせ候なんず。かやうにあづかり給
ふもぜんぜのしゆくゑんにてこそ候らめ。しかるべく候はゞ、御へんゆきむかつて、のりよし
に此事をしらせて、いま一ど見せ給へとなげかれ候あひだ、まいりたりといへば、でんないぞ

ゑもんうちうなづみて、かつきく事すこしもちがはずといふて、やがてかぶとをぬぎ、ゆみをはづし、かう人にこそなりにけれ。これを見て三千よきのつはものども、ゆみをはづしてたがひけり。よしもりしろしやうぞく十六きにて、三千よきのぐんびやうをしたがへてぐしてまいる。平家いくさにはまけたれども、おほいどのふしもいけどりにせられ給はず、又みんぶのたゆうもかう人にもまいらず、はうぐはんいくさにかつて、むまよりおりすはつてやすみ給ふところに、おめくとめされてまいる。やがてよろひぬがせてめしをかれ、人にあづけらる。さてしたがふところのぐんびやうどもはいかにとの給へば、これはふく風にさうもくのなびくがごとし。いづれにてもましませ、世のみだれをしづめ、國をしろしめさん人をかみとせんとぞ申ける。もつともさるべしとて、みなせいにぞぐせられける。くまのべつたうたんそう、此日ごろは平家にしたがひたりけるが、源氏すでにつよるときひて、五十よそうのふねにのり、きいの國たなべのうらよりをしいだし、四こくのちにわたつてけんじにつきぬ。いよの國のちう人、かはの、四郎みちのぶ五百よきにてはせきたり、これもひとつになりにけり。平家はでんないざゑもんいけどりにせられぬときこえしかば、さぬきのしどをいで給ひて、ふねにこみのり、風にまかせしほにひかれて、いづくともなくゆられゆくこそかなしけれ。廿二日みのこく、わたなべにとまりたる二百よそうのふねども、かぢはらをさきとして、やしまのいそにぞつきにける。人わらひあへり。六日のしやうぶ、ゑにあはぬ花、(まつり)の、ちのあふひかなんどぞ申ける。

源氏のふねは、この前
に、第一本、増増
信の事がある。

そのころすみよしのかんぬしながもりのみんの御しよへまいりて、さんぬる十六日うしのこくに、たうしやだい三のしんでんよりかぶらのをといで、にしをさしてゆきぬとそうもんす。ほうわう御かんのあまりに、いろ／＼のへいはく、しゆ／＼のじんぼうをかんぬしながもりにおほせて、大みやうじんへまいらせ給ひけり。むかしじんぐうくはうぐうしんらをせめさせ給ひしに、いせ大じんぐう二じんのあらみさきをさしそへ給ひけり。ふねのともへにたつて、いこくをたひらげまします。一じんはしの、國すはのこほりにあがめられ給ふ大みやう神これなり。一じんはつの國すみよしのこほりにとゞまり給ふ、すみよし大みやうじんこれなり。しやうこのせいばつをおぼしめしわすれず、いま又てうのおんできをほろぼし給ふべきとたのもしかりける事どもなり。ほうぐはんすはうのちにをしわたつて、あにのみかはの守とひとつになり、ちんぜいへわたらんとす。平家はながとのひくしまにつき給ふ。源氏はたうごくあかまがせきにつくとぞきこえける。源氏のふねは三千よそう、平家のふねは千よそう。平家のふねのうちにはたうせんもありけるとかや。源氏のせいはかさなれども、平家のせいはおちぞゆく。三月廿四日うのこくに、ながとの國だんのうらあかまのせきにて、源平やあはせとぞさだめける。その日すではうぐはんとかちはらといくさせんとする事あり。かちはらはうぐはんに申けるは、けふのせんちんをばさぶらひのうちに給り候へと申せば、ほうぐはん、よしつねがなからんにこそ。まぎなや、きみは大しやうぐんにてましますと申せば、かまくら殿こそ大しやうぐんよ。よしつねはぶぎやうをうけ給はつたれば、たゞをの／＼とおなじ事ぞとの給へば、か

ちらは、せんちんをしよまうしかねて、天せいこのとはさぶらひのしうにはなりがたしとぞつぶやきける。はうぐはん、そうじてなんちはおこのものぞとの給へば、こはいかに、かまくらどのゝほかはしうもちたてまつらぬ物をと申。はうぐはん、につくひやつかなとて、たちにてをかけたちあがらんとし給へば、かちはらもちちにてをかけ、身づくるひするところに、みうらのすけとひの二郎むずとなかにへだゝりたてまつる。みうらのすけ、はうぐはんに申けるは、大じを御めのまへにあてさせ給ふ人のかやうに候はゞ、かたきにちからをそへさせ給ひなんず。なかんづくかまくら殿のかへりきかせ給はんとおんびんならずと申せば、はうぐはんしづまり給ふうへは、かちはらすゝむにをよばず。これよりかちはらうぐはんをにくみはじめて、つゐにざんげんしてうしなひけるとぞきこえける。

(だんのうら)

同廿四日のうのこくに、源平ときをつくる。かみはぼん天にもきこえ、しもはかいりうじんまでもおどろきぬらんとぞおぼえたる。もじあかまだんのうらはみなぎりておつるしほなれば、源氏のふねはしほにひかれて心ならずひきおとさる。平家のふねはしほにをふてぞきたりける。しほのはやければ、なぎさにつめて、かちはらかたきのふねのゆきちがふところを、くまでうちかけてのりうつりゝ、さんぐにたゝかふ。ぶんどりあまたしたりければ、その日のかうみやうの一にぞつきたりける。

しほの―おきはしほの、
覺一本。一本。

しん中なごんども、りふねのへにたつて、いくさはけふをかぎりなる。をのくすこしもしりぞく心あるべからず。天ぢくしんだんわがてうにならびなきめいしやうゆうしといへども、うんめいつきぬれば、ちからをよはず。さりながらとうごくのやつによはげ見すな。いつのためいのちをばおしむべきか、これのみぞども、りはおもふ事との給へば、ひだの三郎ざゑもんかねつね、おほせうけ給はれやさぶらひどもとぞ申ける。あく七びやう衛かげきよが申けるは、なかばんどうのやつばらはむまにのりてこそくちはきゝ候ども、ふねのうちにはいつちうれんし候べき。うほの木にのぼりたるやうにこそ候はんずれ。さればしやつばらいちくにとつてうみにつけ候はんとぞ申ける。あつ中の二郎びやう衛申けるは、九郎はうぐはんは、いろしろきおとこのたけひきく、むかふば二ツさしいで、ことにしるかんなる。心こそたけくとも、なに事のあるべき。めにかけてひつくんでうみにいれやとのばらとぞ申ける。しん中なごん、おほほいどの、御まへにまいりて申けるは、けふはさぶらひ共ことよげに見え候。一ぢやういくさこそつかまつらんとおぼえ候へ。その中にあはのみんぶなりよしばかりこそ、心がはり候やらん、きがかはつて見え候へ。きやつがくびをきり候はゞやと申されければ、おほいどの、いかにみえたる事もなくて、くびをばきるへき。なりよしめせとてめされける。もくらんぢのひたゝれに、あらひがはのよろひきて、御まへにかしこまる。いかになりよし、日ごろのやうにさぶらひどもいくさよふせよなんどおきてをばせぬぞ。なんぢは心かはりしたるか。おくしたるかとの給へば、たゞいまなに事にかおくし候べきとて、こともなげに御まへをまかりた

つ。中なごん、あつばれしやつがくびをきらばやとおもはれけれども、おほいどのゝゆるしなければきり給はず。平家は千よそうのふねを三てにわか。せんちんは山がのひやうどうじひでとを五百よそう、二ちんはまつらたう三百よそうにてまいり給ふ。せんちんにすゝみたる山がのひやうどうじひでとをはかりごとゝおぼえて、せいびやうを五百人そろへて五百そうのふねのへにたていさせけるに、よろひもたてもいとをさる。源氏のふねいしらまされて、こぎりぞく。平家はこれを見、みかたすでにかちぬとて、せめつゞみうつてよろこびのときをつくる。くがにもげんじのぐんびやう七千よきひかへてたゝかひけり。そのうちにさがみの國のちう人、みうらのわだのこ太郎よしもり、ふねにはのらで、これもむまにのり、ひかへてたゝかひけるが、三ちやうがうちのものはいはずさず、三ちやうよりおきにうかびたる中なごんのふねをいこして、しらのゝ大やを一ツなみのうへにぞいうかべたる。わだのこ太郎あふぎをあげて、そのやこなたへかへしたばんとぞまねきける。しん中なごん、このやをめしよせて見給へば、しらのにこうのはにてはいだるやの、十三ぞくみつふせありけるが、くつまきのうへ一そくをきて、みうらのわだのこ太郎よしもりとうるしをもつてかきたりけり。いよの國のちう人、にゐのきの四郎ちかいゑをめして、此やいかへせとの給へば、ちかいゑ、いぎも申さず、わがゆみにとつてつがひいたりけり。おきより三町あまりをつといわたし、わたがゆんでのかたをのうちにうつてつれてひかへたる、むさしの國のちう人、いしぎこの太郎ががひなにくつまきまでこそいこふだれ。わだの小太郎、われにすぎたる大やなしとおもひ、いかへさせた

りと一けのつはもの共にわらはれて、はらたてゝ、むまよりおり、こぶねにのつて、をしいださせ、平家のふねのなかをしめぐりゝ、さしつめひきめいけるに、おもてをむくるものなし。平家のかたより又はうぐはんのふねに大やを一ツいたてゝ、そのやこなたへたばんとぞまねきける。めしよせて見給へば、しらのにつるのもどじろにてはいだるやの、十四そくありけるに、たゞいまかきたる（と）おぼえて、いよの國のちう人、にみのきの四郎ちかいゑとぞかひたりける。ごとうひやうゑさねもとをめして、此やいかへしつべきものはなきかとの給へば、などかは候はざるべき。かいげんじ（ひ）のなかに、あさりのよ一どのこそおはすらめ。さらばとてめされけり。よ一こぶねにのりていできたる。いかにあさりどの、此やいかへせとの給へば、此や給り、つまよつて見て、此やはやづかゞみじかふ、のもよはく候。よしなりがやにてつかまつらんとて、大なかぐろにてはゐだるやの、十五そくありけるをつがひ、しばしたもちてひやうどいる。とをやいて、おもふ事なく大ふねのともたつたるにゐのきの四郎がうちかぶどあなたへづんといゐだされて、ふなそこへぞたはれける。さるほどに源平みだれあひ、すこくたゝかふ。しらくも一むら、源氏のふねのちんのうへにたなびみて見ゆるが、くもにてはなかりけり。ぬしなきはた一ながれまひくだつて、源氏のふねのへさき、さほづけのをつくるほどに見えて、又そらへぞのぼりける。つはもの共これを見て、いそぎてうづうがひどもしておがみたてまつる。こん日源氏のまけいくさと見えしところに、此ずいさうを見て、これほどに八まん大ぼさつのしゆこせさせ給はんずるに、いかでかいくさにかたざるべきとぞいさみあ

ひける。いるかといふうほ一二千、平家のふねにむかふてはみければ、おほいどの、みやこよりめしぐしたるはるのぶといふおんやうしをめされて、きつとかんがへ申せとおほせければ、はるのぶかんがへて、此いるかはみとをり候はゞ、みかたのいくさあや（う）ふ候べし。はみかへり候はゞ、源氏ほろび候べしと申もはてねば、いるか平家のふねのしたをはふてぞとをりける。あはのみんなりよしは、三がねんのあひだ平家にちうをつくしてありけれ共、ちやくしでんないざゑさんを源氏のかたへいけどられて、おんあいのみちのかなしきは、いま一ど見んとおもひければ、たちまちに心がはりして、あかじるしきりすて、源氏のかたへぞつきにける。平家はたうせんにはつぎさまのものをす。源氏さだめてたうせんをせめんずらむとてなり。ひやうせんにしかるべき人々をのせて、げんじをなかにとりこめてうたんとしたくしたりけるところに、なりよしかへりちうして、たうせんにはよき人のり給はぬぞ。ひやうせんいよとをしゑければ、さしあはせてさんぐゝにいる。さてこそしたくさういしてんげれ。たゞいままでしたがいつめたりけん四こくさいこくのつはもの、きみにむかふてゆみをひき、しうにむかふてたちをぬき、かのきしへつげんとすれば、なみたかふしてかなはず。此うらによらんとすれば、かたきまちかけてうたんとす。源平の國あらそひ、けふをかぎりと見えたりけり。すいしゆかんどりどもうちころされ、きりふせられ、ふなぞこにたふれふためき、さけぶこゑこそかなしけれ。

(はやとも)

しん中なごんともゝり、御しよの御ふねにまいり給ひて、ねうばうたち、見ぐるしきもの共みなうみにしづめ給へとの給へば、女ばうたち、此世の中はいかに／＼との給ふ。しん中な言いとさをかぬていにて、いくさはすでにかふ候よ。けふよりのちは、めづらしきあづまおとこそ御らんせんずらめとうちはらひ給へば、なんちうたゞいまのたはぶれぞやとぞ、おめきさけび給ひける。二ゐどの、せんていをいだきたてまつり、をびにて二ところゆひつけたてまつり、ほうけんをこしにさし、しんじをわきにはさみ、ねりばかまのそばをたくはさみ、にぶいろのふたつきぬうちかつき、すでにふなばたにより給ひ、わがみはきみの御ともにいるなり。をんなゝりともかたきのてにはかゝるまじきぞ。御めぐみにしたがはんとおもはん人は、いそぎ御ともにまいり給へとの給へば、こくぼをはじめたてまつり、きたのまんどころ、らうのおかた、そのすけ、大な言のすけ、いげの女ばうたちも、をくれまいらせじともだえられけり。せんてい、こんねんは八さい、御としのほどよりもおとなしく、御ぐしゆら／＼と御せなすぎさせ給ひけり。あきれ給へる御さまにて、これはいづちへぞやとおほせられければ、御ことばのすゑおはらざるに、二ゐ殿、これはさいはうじやうどへとて、うみにぞしづみ給ひける。あはれなるかなや、むじやうのはるの風、はなのすがたをさそひたてまつる。かなしきかなや、ぶんだんのあらしなみにりうがんをしづめたてまつる。でんをちやうせいでんとなぞら

二ゐ殿以下、第一本は詳細である。

へ、もんをふらうもんとことよせしに、十さいにだにもみたせ給はで、うん上のりうくだつて、かいていのうほとならせ給ふ。こくぼもつゝゐていらせ給ひけるを、わたなべのうまのじうつがふといふもの、くまでをおろして、御ぐしにかけ、とりあげたてまつる。女ばうたちいけどりにせられておはしけるが、あさましや、あれはねうぬんにてわたらせ給ふぞとの給へば、そのとき、つがふ、よろひからうとより、あたらしきこそで一かさねとりいだし、しほたれたるぎよいにめしかへさせたてまつる。きたのまんどころ、らうのおかた、そつのすけ以下（下）のねうばうたち、みなとらはれ給ひけり。ほん三ゐの中將のきたのかた、大なごんのすけ、ないしどころの御ひつをとりて、うみへいれんとし給ふが、はかまのすそをふねにいつけられて、けつまづき給ふところを、つはものとりとゞめたてまつり、御からびつのじやうをねぢきつて、御ふたあけんとしければ、たちまちめくれはなぢたる、平大なごんときたゞのきやういけどられておはしけるが、これを見て、あなあさましや、あれなしいどころと申、かみにてわたらせ給ふ物を、ぼんぶは見たてまつらぬをとの給へば、九郎はうぐはん、さる事あらんずるぞ。そのけよとて、平大なごんに申て、もとのごとくおさめたてまつる。すゑの世なれども、かやうにれいけんあらたなるこそめでたけれ。かどわきの平中なごんのりもり、しゆりの太夫つねもり、きやうだいは、てにてをとりくみ、うみにぞしづみ給ひける。こまつ（三）の三ゐの中將すけもり、同せうしやうありもり、いとこさまのかみゆきもり、にう道の四なんともゝり、これもてをてにとりくみしづみ給ふ。おほいどのはふなばたにたちいでゝ、人々うみにし

づみ給へども、そのけしきもなきを、さぶらひどもあまりのにくさにうみへつきいれたてまつる。御こゑもんのかみ、これを見て、つゞめてうみへぞいり給ふ。おほいどのは、ゑもんのかみしづまば、われもしづまんとおもはれけり。又ゑもんのかみは、おほいどのしづみたまはゞ、ともにしづまんと、二人の人人やゝひさしふなみのうへにうかんでおはしけるを、いせの三郎ふねをこぎよせ、くまでをおろして、ゑもんのかみをとりあげたてまつる。おほいどの、いとゞしづみもやり給はず。おなじくいけどられ給ひけり。おほいどの、御めのと、ひだの三郎ざへもんかけつね、わがきみとりあげたてまつるはなにものぞとて、たちをぬき、いせの三郎にうちてかゝる。よしもりあぶなく見ゆるところに、ならびのふねにたちたるほりのや太郎よつびゐている。ひだの三郎ざへもんうちかぶといさせてひるむところを、ゆみをすてむずとくむ。三郎ざへもんてをふたれども、ちどもをくれず、うへになりしたになりころびあふとくろに、ほりがうどう三郎ざへもんがくさずりひきあげ、二かたなさす。うちかぶともいたでなり。かげつねつゐにうたれにけり。おほいどの身にかはりてもとおもはれける、めのとこのなりゆくありさまを見給ひて、さこそかなしくおもはれけん。のとのぜんじのりつねは、やだねつき、いまはさいごとおもはれければ、あかぢのにしきのひたゝれに、ひおどしのよろひきて、源氏のふねにのりうつり、しらえのなぎなたくきみじかにとつてなぎ給へば、つはものおほくほろびにけり。しん中なごん見給ひて、つかひにて、せんなきしはざかな。あまりにつみなつくり給ひそ。さればとてしかるべきものにてまなしとのたまへば、さては此ことば大しや

うぐんにくめとごさんなれとて、その、ちは源氏のふねにのりうつり、をしわけ、九郎はうぐはんをたづね給ふ。おもひのまゝにたづねあふて、よろこびもつつかゝる。はうぐはんかなはじとやおもはれけん、なぎなたわきにかひはさみ、一ぢやうばかりゆらととび、みかたのふねにのり給ふ。のと殿心はたけけれども、はやわざやをとられけん、つゝあてもこえ給はず。はうぐはん殿まぼらへて、これはどうんつきなんうへはとて、なぎなたうみへなげいれ、かぶともぬゐでうみへいれ、よろひのそでをかなぐりすて、大わらはにてたち、われとおもはんもの、のりつねいけどり、かまくらへぐしてくだれ、ひやう衛のすけにものいはん、よれやゝとの給へども、よるものなかりけり。こゝにとさの國のぢう人、あきのこほりをち(ぎ)やうしけるあきの太りやうがこに、大りやう太郎さねみつとて、三十人がちからあり。おとゝあきの二郎もとらぬしたゝかもの、しうにをとらぬらうどう一人、あにの太郎、はうぐはんの御まへにすゝみいで、申けるは、のと殿によりつくものなきがほぬふ候へば、くみたてまつらんとぞんするなり。さ候へば、とさに二さいになり候、おさなきもの、ふびんにあづかるべしと申せば、はうぐはん、しんめうに申たり。しそんにをひてはうたがひあるまじきとの給へば、あきの太郎しうゝ三人こぶねにのり、のと殿のふねにうつり、しころをかたぶけ、かたをならべて、うちむかふ。のとのせんじ、さきにすゝみたるらうどうを、にくひやつかなとて、うみへざんぶとけいれらる。太郎をばひだりのわきにはさみ一しめしめて、いざうれ、さらばをのれらしでの山のともせよとて、しやうねん廿六にて、つゐにうみへぞいり給

ふ。しん中なごん、これを見て、いがのへいなきゑもんいゑながをめて、いまは見るべき事は見はてつ。ありとてもなにかせんとの給へば、へいなきゑもん、ひごろのやくそくちがひたてまつるまじとて、よつて、よろひ二りやうきせたてまつりまいらせ、わが身も二りやうき、てをとりくみ、うみにぞいりにける。へいぜい一しよにとちぎりしさぶらひども、廿よみなてをとりくみ、うみへぞいりにける。かいじやうにはあかはたあかじるし、なげすてかなぐりすてたれば、たつた山のみぢのあらしにちるがごとし。なきさによするしらなみも、うすくれなみにぞなりにける。むなしきふねは、かぜにまかせて、いづくともなくゆられゆく。いけどりの人々は、ない大じんむねもり、平大なごんときたゞ、ゑもんのかみきよむね、くらのかみのぶもと、さぬきの申しやうときさね、ひやうぶのせうまさあきら、そうにはほつじうじのしゆぎやうのうゑん、二みのそうづぜんしん、中なごんのりつしちうくはい、きやうじうばうのあじやりゆうゑん、さぶらひには、源太夫はうぐはんすゑさだ、つのはんぐはんもりずみ、とうないざゑもんのおやす、きちないざゑもんすゑやす以下、三十八人。女ばうたちには、こくぼけんれいもんゑん、きたのまんどころ、らうのおかた、そつのすけ、大なごんのすけ、ちぶきやうのおつぼねいげ、をよそ四十三人とぞきこえし。げんりやく二年のはるのくれ、いかなるとし月にて、一人うみのそこにしづみ、百くはんなみのうへにうかぶらん。こくぼくはんちよは、とういせいじうのてにしたがひ、しんかけいしやうは、すまんのぐんりよにとらはれて、きうりにかへり給ひしに、あるひはしゆばいしんがにしきをきて、こきやうへかへらざる事を

かなしみ、あるひはわうしうくんがここ（く）へむかふおもひもかくやとおぼえてあはれなり。

（平家一もんおほちわたし）

同四月三日、さいこくよりはやまみんの御しよへまいる。つかひは源八びやう衛ひろつなどぞきこえし。さんぬる三月廿四日のうのこく、だんのうら、あかまのせき、たのうら、もじがせきにて、平家つみにせめおとし、ないしどころ、しんじかへりいらせまします。おほいどの以下、いけどりもす十人あひぐしてまいり候とそうもんしければ、ほうわう、御ふしんのあまりに、ほくめん候、とうはんぐはんのふもりをめして、さいこくへつかはす。同十六日、はうぐはん、おほいどのいけどりあひぐして、あかしのうらにぞつき給ふ。その夜は月おもしろくして、あきのそらにもをとらず。女ばうたち、つきせぬおもひのうちに、おもひであり。むかしはなのみき、しあかしの月をいま見る事のふしぎさよとて、うたをよみなんとしてなぐさみあはれけり。その中に、平大なごんのきたのかた、そつのすけ、こかをおもひだし、ながむればぬるゝたもとにやどりけり月よくもめの物がたりせよ

となくくちずさみ給へば、はうぐはん、あづまおとこなれども、ゆうにゑんなる心ちして、あはれにぞおもはれける。同廿五日ないしどころ、とば殿につかせ給ふ。御むかへのくぎやうには、かげのゆのこうちの中なごんつねふさ、たかくらのさいしやうやすみち、てん上人には、ごんの中べんかねたゞ、ゑなみの中じやうきみとき、たちふせうしやうのりよしぞま

いられける。御どものぶしには、いしかはほんぐはんだいよしかね、いつのくらんどの大夫よりかね、さゑもんのじうありつなどぞきこえし。その夜ねのこくに、ないしどころ、大じやうくはんのうしよへいらせ給ふ。なみのうへにうかびたるしんじは、かたおかの太郎ちかつねがとりあげて、はうぐはんにたてまつるとかや。しんじをしるしのこと申。ほうけんはながくしづみて見え給はず。かづきするあまにおほせてもとめさせ、又すいれんちやうぜるものをめしてもとめさせらるれども見えざりけり。天じんちぎ、へいはくをさゝげ、大ほうひほうをしゆせられけ共、けんなし。りうぐうにおさめてんげるやらん。そのうちはいまだいでこず。二のみや都へいらせ給はず。みやこにだにもましませば、此みやこそくらゐにもつかせ給ふべきに、これも四のみやの御うんのめでたくわたらせ給ふによつてなり。御心ならず平家にとられて、此三がねんがあひだ、さいこくのなみのうへにたゞよはせ給ひしかば、御ぼぎも、御めのとのちみやうゐんのさいしやうも、いかなる御ありさまにかきゝなしまいらせんずらむとて、あさなゆふなたゞなくよりほかの事ぞなき。されどもいまべちの御事なくかへりのぼらせ給ひたれば、みなよろこびのなみだをぞながしあはれける。ほうわうよりもむかひに御くるまをぞまいらせらる。御むかひには、七でうのじゝうのぶきよ、きいのかみのりみつとかや。七でうの御ぼぎの御しよへいらせ給ひける。同廿六日、へいけのいけどり、みやこへいる。みな八ようのくるまにのせたてまつる。ぜんこのすだれをあげ、さうのものをひらかれたり。おほいどのはじやうゑをき給ふ。御こゑものかみしろひたゝれきて、ちゝのくるまのしづわ

にのり給ふ。平大なごんときたゞのくるまもおなじくやりつれられたり。そのこさぬきの中將ときざねどうしやにてわたさるべかりしが、まことにしやううにてわたされず。くらのかみのぶもとは、きずをかうぶりたれば、かんだうよりぞいりにける。つはものぜんごにうちかこみたり。いく千まんといふかずをしらず。おほいどのは四はうを見まはし、いたくおもひしづめるけしきも見え給はず。ゑもんのかみは、ひたゝれのそでをかほにをしあて、めもあけ給はず。さしもゆうなりし人々の、三がねんのあひだ、しほかぜにやせくろみ、その人とも見え給はぬぞいとをしき。いけどりの人見んとて、みやこのうちにもかぎらず、ゑんごくきんごくのきせん上下、やまゝてらゝより、らうせうきたりあつまる。とばのみなみのもんより、よつづかまでみちゝたり。人はかへりみる事をえず、くるまはながえをめぐらす事をえず。

(ぢ) しょうやうわのきゝん、とうごくほつくのかつせんに、人だねはみなほろびたりといへども、なをのこりておほかりけるとぞ見えし。みやこをいで給ひてもな一年、むげにまちかきほどなれば、めでたかりし事共をわすられず、おやおちのだいよりつたはりて、めしつかはれたるもの共、身のすてがたさに、みな源氏につきたれ共、むかしのよしみをわすれねば、なみだをながす人おほかりけり。その日おほいどのゝくるまをつかひけるうしかひは、もとめしつかはれし三郎丸といふものなり。や二郎丸、三郎丸とてきやうだいありつるが、平家みやこをおちてのち、や次郎は木そにつかへぬるが、木そうたれてのち、しゆつけしてんげり。こればかりおとこにてありけるが、とばにてはうぐはんの御まへにすゝみいで、申けるは、とねり

うしかひと申は下らうのはてにて、心あるべき身にては候はね共、としごろのよしみいかでかわすれたてまつらん。しかるべくんば、御ゆるしをかうぶり、この日おはいどの、御くるまをつかまつらばやと申せば、なさけふかき人にて、さるべしとぞゆるされける。三郎丸はよろこび、なく／＼御くるまをつかまつる。みちすがらくるまのうちののみかへりみて、なみだせきあへず、されば見る人そでをぞしほりける。大みやをのぼりに、六でうをひがしにわたされ給ふ。ほうわうも六でうひがしのとうあんに御くるまをたてゑいらんあり。くぎやうてん上人のくるまもおなじくたてならべられたり。人々これを見給ひて、あの人々にめをも見かけられ、一ことばをもきかばやなんど、こそおもひしに、かく見なすべしとははからざりし事をとぞ、をの／＼の給ひあはれける。ある人いはれけるは、一とせない大じんになりて、いはひ申のありしとき、くぎやうにはくはさんのあんの大なごん、やがて此平大なごんもおはしき。てん上人、くらんどのかみいげ、十六人せんぐうして、われをとらじと、めん／＼にきらめき給ひし、ぎしきありさま、ゆうなりし事どもなり。まいり給ふところごとに、御ぜんにめされて、御ひきでものどもたまはられし事、むかしもいまもためしすくなかりしに、いまはげつけいうんかく一人もともなはず、さいこくにておなじいけどりにせられし源太夫はんぐはんすゑさだ、つのはんぐはんもりずみ、これ二人ぞしろひたゝれき、ばしやうにせめつけられてわたされけり。六でうをひがしへ、かはらをわたされてのち、九郎はうぐはんの六でうほりかはのしゆくしよにいられたてまつる。ものまいらせたれども御らんじもいれられず。ひまなくなみだをぞ

ながさせ給ひける。夜になれども、しやうぞくだにものけ給はず、そでをかたしきなきふし給へり。御こゑもんのかみ、そばにね給ひたりしに、おほいどのぎよいのそでをきせ給へば、しゆごのふし、これを見て、おんあひとてなにやらん、せめての心ざしのいたすところよとて、たけきつはものもみなそでをぞぬらしける。同廿八日さきのひやうへのすけよりも、じゆ二みにじよせらる。もとは正四の下なりしが、おつかいとて、三かいするぞありがたきてうおんなるに、これはすでに三がいなり。三ゐこそし給ふべかりしが、へいけのしたりしをいまふてなり。それよりしてぞかまくらみなもとの二ゐどのとは申ける。その夜のねのこくに、ないしどころうんめいでんへいらせ給ふ。ぎやうがうなつて、三が夜りんじの御かぐらあり。ちやうきうぐはんねん九月、ゑいりやぐはんねん四月のれいとぞきこえし。平大なごんときたゞのきやうも、はうぐはんのしゆくしよちかくありけるが、なをいのちやおしかりけん、しそくさぬきの中じやうをよふで、ちらすまじきふみどもをよしつねにとられてたるぞ。此ふみくはんとうへ見えなば、人もそんじなんす。わがみもいけらるまじとの給へば、中じやう、はうぐはんはなさけぶかきおとにて、女ばうなんどのうつたえは、いかなる大じをもはなたずとうけ給る。ひめ君かずましませば、なにかくるしかるべき。一人ま見えさせ、したしくなりて、此よしおほせらるべうや候らんと申されければ、むざんやわれ世にありしときは、ねうごきさきにもとこそおもひつれとの給へば、いまはその事おぼしめしよるべからずとぞ申されける。たうふくの十七になり給ふはあまりにおしみ給へば、さきのはらのひめぎみの廿三になり給ふをぞ

けんれいもんあんしん
下は、愛一本、灌頂巻
にあり。

はうぐはんに見せられける。ゆうにやさしき人なれば、はうぐはんよろこび給ひて、もとのかみ、かはごえのこ太郎しげよりがむすめもありしかども、べちの御かたにじんじやうにもてなされけり。あるとき女ばうくだんのふみの事を給ひいだされたりければ、さる事候とて、あまつさへふをもとかず、大なごんへぞをくられける。ときたゞよろこびてすなはちやかれけるとかや。いかなる事かありつらん、おぼつかなしとぞ人申ける。けんれいもんあんしんはひがし山のふもと、よしだのへんにぞたちいり給ひける。中なごんほういんけいゑと申ならほうしのぼうなりけり。すみあらして、にはにはくさふかく、のきにはよもぎしげり、すだれたえ、ねやあらはれて、あめ風たまるべきやうもなし。花はいろ／＼にほへども、あるじとたのむ人もなく、月はよなくさしいれども、ながめてあかすともなく、むかしはたまのうてなをうがき、にしきのちやうにまとはれて、あかしくらさせ給ひしに、いまはありとしありし人にはわかれはてゝ、あさましきすまめこそかなしけれ。女ばうたちも、これよりちり／＼になり、うほのくがにあがれるごとく、とりのすをはなれたるさまなる。なみのうへいまさらこひしかりけり。同五月一日ねうめん御ぐしおちせ給ふ。御かいのしには、ちやうらくじのべつたう、あしうばうのしやう人いんさいなり。御ふせには、せんていの御なをいとかや。しやうにん給ひて、とかくのことばはいださねども、すみぞめのそでをぞしぼられける。そのごまめされたれば、御かきもいまだつきす。かたみとてこれまでもたせ給ひしかども、御ぼだいのためなればとて、なく／＼とりいだし給ひけり。これをはたにぬひ、ちやうらくじのしやうめんにかけら

れけるとぞうけ給る。ねうめん十五にてねうごのせんじをくだされ、十六にてこうひのくらゐにそなはり、くんわうのそばに候はせ給ひて、あしたにはあさまつりごとをすゝめ、夜はよをもつばらにし給ふ。廿二にてわうじ御たんじやうありて、くはうたいしにたゝせましゝ、廿五にてめんがうかうぶらせ給ひて、けんれいもんめんぞ申ける。にう道の御むすめなるうへ、天がのこくばにてましませば、どかふ申にやをよぶ。こんねん廿九にぞならせ給ひける。たうりのよそをひなをにほやかに、ふゆうのすがたいまだおとろへたまはねども、ひすいのかんざしをつけてもいまはなにゝかせんと、なくゝ御さまをかへさせ給ふ。人々しづみしありさま、せんでいの御おもかけ、いつのよにかわすれ給ふべき。五月のみじか夜なれども、あかしかね給へば、むかしをゆめにも御らんぜず、かべにそむきたるのこんのとしびのかすかに、夜もすがらまどをうつあめのをと、さびしかりけり。上やうじんがしやうやうきうにとちこめられけんかなしさも、これにはすきじとぞ見えし。むかしをしのぶつまとなれとてやらん、もとのぬしがうつしうえたるやらん、のきちかくはなたちばなのありけるが、風なつかしくかほりけるおりふし、山ほとゝぎすをとづれてすぎければ、御すゞりのふたにこかをかうぞあそばしける。

ほとゝぎすはなたち花のかをとめてなくはむかしの人やこひしき

ねうめん二お殿のやうにみづのそこにもしづみ給はず。ふしどもにいけどられ、おもひもかけぬいはのはざまにぞあかしくらさせ給ひける。すまゐしやどはけぶりとあがり、むなしきあと

のみのこりて、しげみののべとなりつゝ、見なれし人のとひくる事もなし。せんかよりかへりて、七せのまごにあひけんも、かくやとおぼえてあはれなり。ほん三めの中じやうしげひらのきたのかたは、五でうの大なごんくにつなのきやうの御むすめ、せんていの御めのと、大なごんのすけとぞ申ける。しげひらいけどられ給ひぬときこえしかば、さいかいのたびのそらまでなげきかなしみ給ひしが、せんていにをくれたてまつり、あねの太夫三ゐとどうしゆくして、ひのといふところにおはしけり。中じやうつゆのいのちいまだきえやらぬ(と)きゝしかば、いま一ど見もし見えばやとたがひにおもはれけれども、かなはねば、たゞなくばかりにてあかしくらし給ひけり。

(つるぎのまき上)

かみよよりつたはれる二つのれいけんあり。とづかのけん、むらくものけんこれなり。とづかのつるぎはそさのおのみこと、大じやをきり給ひてのち、あめはへきりのけんとなづけらる。やまとの國いそのかみふるのやしろにこめられたり。むらくものけんは、のちにくさなぎのけんとかうす。だいにあつて御まぼりたりしに、此たびながくしづみて見えず。それかみよといつば、てんじんのはじめ、くにとこたちのみことはいろはありてたいなし。こくうにある事けぶりのごとし。たゞてんちいんやうのぎなり。くにさたちのみことより、たいはありてめんもくなし。とよくむぬのみことより、めんもくはありて、いんやうなし。だい四よりいんやう

ありて、わがうなし。うひぢにのみこと、すひぢにのみこと、おほとのちのみこと、おほとのまへのみこと、おもたるのみこと、かしこねのみこととうなり。だ七^(い)だい、いぎなきいぎなみより、あまのうきはしのもとにして、はじめてわがうのまじはりあり。下かいなき事をおもひ、あまのさかほこをもつて、大かいのそこをさぐり給ふ。ひきあげましますほこのしたぐり、しまとなる。あはぢよとの給へは、あはぢしまと申けり。それよりくにぐいできたり。さんかさうもくをひちやうじ、またぬしなからんやとて、一によ三なんうみ給ふ。日じん月じん、ひるこ、そさのうこれなり。日じんはこれ天しう大じん、國をゆづり給へり。月じんはつきよみのみこと、やまとだけをゆづり給ふ。ひるこは五たいふぐなれば、あまのうきふねにのせたてまつり、おほうみへながされしが、つの國にかゝつて、うみをりやうするかみとなる。にしのみやこれなり。そさのうは、しよぶんなしとて、いこんあり。つめにいづもの國へながされ給ふ。そのくにきりがさき、日のかはかみの山に、おかしら八ツの大じやあり。せはこけむして、まなこは月日のごとし。としぐに人をしよくす。おやのまれてこかなしみ、このまれておやなげく。みことあはれみ給へば、らう人ふうふなきみたりけるが、中に一人のびちよあり。いかにととひ給ふに、じうはこれてなづち、うばはこれあしなづち、これなるが、むすめいなたひめと申。かのひめ大じやがためにこよひゑじきにあひあたりぬれば、なきかなしめりと申。みことあはれにおぼしめし、ひめをえさせなば、大じやをしたがへんとの給へば、しきいにやをよび候。やがてはかりごとをぞなされける。八ツのふねにさけをいれ、なかにたかく

たなをかき、つよく八えがきをかまへ、ひをとぼし、あかりにひめをよそをへば、八ツのふねにかげうつる。これをのみしかば大じや八またともにえひふしけり。此ときとづかのけんをもつて、だん／＼にきり給ふに、一ツきれざるおあり。あやしみ見給へば、中に一ツのれいけんあり。大じやのおにありしときはつねにやいろのくもたちければ、あまのむらくもとかうし、國をいづもと申なり。さてこそみことのうたに、

やくもたついてもやえがきつまこめてやえがきつくるそのやえがきを

それよりしてこそ、三十一じははじまりけれ。大じやはふうすいりうわうあまくだりし。しゝてのちあふみとみのとのさかひなるいぶきのみやうじんこれなり。ひめをばやがてみことへまいらするに、かづらよそをひたるつげのつまぐしを、かたみにとてうしろへなげければ、ふうふこれをとりてのち二たびあはず。それよりわかれのくしとはいひつたへたり。みことはいづもの國へみやあまし／＼き。いまだやしろこれなり。

かのけんは又天しう大じんにまいらせられ、御なかなをらせ給ひけり。それよりだい／＼つたはりしを、だい十だいのみかど、そうじん天わう、おなじでんにはをそれありとて、いせ大じんぐうへうつしたてまつり給ひけり。十二だいのみかど、けいかう天わう四十年の六月どういそむけり。第二のわうじ、やまとだけのみこと、くはんぐんをめしぐして、同十月都をたゝせ給ひ、まづいせ大じんぐうへさんけいある。御いもうどのいつきのみやをもつて、みかどの御めいにしたがつて、とういにまかりむかふよし申給へば、つつしんでをそるゝ事なかれとて、

むらくものけんを給りけり。これをはめてくだり給ふに、かの大じやなをいきどをりやまずして、おほちにふしはびこる。やふりてとをりがたしとて、くはんぐんみなかへりければ、ふわのせきとは申なり。やまとだけのみこと、もとよりかうにましませば、くんめいそむきがたしとて、一人ふみこえ給ふ。御あしほどをりたえがたし。心にひぐはんをおこし、しみづにひやし給へば、ほどをりさめけり。さめがいのみづこれなり。するがの國までせめくだりましますに、その國のきうと、かりのあそびと申しらゑ、うきじまがはらへぐそくし申。四はうの野にひをつけ、やきころしたてまつらんとせしとき、ぎよけんにて、三十よちやうのくさをながれければ、すなはちもえのきぬ。それよりしてぞくさなぎのけんとは申たてまつる。かくてみとせのうちに、あづまをせめしたがへ、同十三ねんみづのとのひつじにかへりのぼらせ給ふが、御くだりのとき、おはりの國まつがこじまといふところの源大夫がむすめ、いはとびめに一夜のちぎりあさからずして、又たちよらせ給ふ。御なうつかせましゝて、いけどりのゑびす共を、たけひこのみやにおほせて、みかどへたてまつり、あふみの國せんぼんのまつばらといふところになやみふし給ひしを、いはとびめ心もとなくおぼして、たづねゆかれければ、みことうれしさのあまりに、あはつまとの給へば、ひがしをあづまとなづけられけり。みことはたちかへり、まつがこじまにてはて給へば、國をおはりと申なり。しろきとりとなりて、にしをさしてとびさりぬ。しらとりづかこれなり。けんをたつくりのき大夫といふものがたなかのすぎはらにざんじよせかけをかれたれば、けんのひかりもえたちて、すぎみなやけにけり。い

まのあつたこれなり。やまとだけのみことは、大みや神とげんじ給ふ。^(う)いはとびめも源太夫もたつくりのき大夫も、おなじくかみとぞいはゝれける。はたおさめられし所をば、はたやとかうして、いまにあり。よりも源氏の大しやうとなるべきゆへにや、かのはたやにてぞむまれ給ひける。けんはそのまゝあつたのみやにこめられしを、天ぢ天わう七ねんに、しんらのみかどより、しやもんだうきやうをわたして、此けんをぬすまんとせしを、すみよしのみやう神、けころし給ふ。なをのぞみをかけしゆへ、いきふどうといふひじりに、七ツのけんをもたせ、日ほんへわたさる。おはりの國へつきしかば、あつたのみやの神けころし給ふ。^(う)七ツのけん御けんにくはへてほうでんにいはゝれけり。いまのやつるぎ大みやうじんこれなり。天む天わうの御う、しゆてうぐはんにだいりにおさめたてまつり給ひ、ほうけんとなづけらる。むかしはかうこそありしに、いまかいていにしづみし、すゑのよこそうたてけれ。つら／＼ことの心をあんずるに、大じやのしうちやくふかゝりければ、みなかれがけしんにて、つるぎをとらんとしてんげるにや。ふわのせきの大じやも、しやもんだうきやう、いきふどう、みな此けしんなり。あまつさへ、わがてうのあんどく天わうとむまれ、八さいのりうによのすがたをしめさんがために、八さいのていわうのたいをあらはして、かのつるぎをとりかへし、ふかくりうぐうにおさめけるとかや。

(つるぎのまき下)

げんけに二ツのつるぎあり。ひざ丸ひげきりと申けり。にんわう五十代のみかど、せいわ天わうだい六のわうじ、さだよしのしんわうと申たてまつる。その御子つねもと、六そんわう、そのちやくし、たゞのまんちう、かうづけのすけたりしとき、みなもとのしやうを給はつて、天がのしゆごたるべきよし、ちよくちやうありければ、まづよきつるぎをぞもとめられける。ちくぜんの國(かき)みさかのこほりいで山といふところより、かちの上(けり)ずをめされく□。かれもとよりめいさくなるうへ、うさのみやにさんろうして、きやうこうつるぎ(の)みとくをぞいのりける。なむ八まん大ぼさつ、ひぐはんあにせんなからんや。たの人よりもわが人なれば、うちこをまばり給ふらめ、しからばかのたちをつるぎとなし、源氏のしやうのゆみやのみやうがながくまばり給へと、ふかくたんしんをぬきむで、御やしるをいでにけり。やがてみやこへのばり、さい上のくろかねを、六十日きたい、つるぎ二つくりけり。いづれも二しやく七寸なり。人をきるにをよんで、ひげ一もうものこらずきければ、ひげきりとなづけらる。いま一ツは、もろびさをなぎすましたりとて、ひざ丸と申なり。まんちうのちやくし、つのかみよりみつにつたはりける。かるとき人おほくかきけすやうにうせにければ、おそろしかりし事どもなり。これをくはしくたづぬるに、さがの天わうの御う、あるをんな、あまりに物をねたみ、きふねの大みやう神にいのりけるは、ねがはくはおにとなり、ねたましとおもふものをとりころさばやとぞ申ける。かみはしやうじきなれば、じげんあらたなり。やがてみやこにかへり、たけなるかみを五ツにまき、まつやにをもつてかため、五ツのつをつくり、おもてにはしゆをさし、身にはた

んをぬる。かしらにかなわをいたゞき、三ツのあしにたいまつをゆひつけ、ひをとぶし、夜にだになれは、やまとおほちをみなみへゆき、うちのかはせに三七日ひたりければ、あふものきもをけし、やがておにとぞなりにける。うちのはしひめとはこれなり。にくしとおもふをんなのゑんじやどもをとるほどに、のこりずくなくうせにけり。京中さるのこくよりのちは、もんをとちてをともせず。そのころよりみつのらうどうに、わたなべの源四郎つなどいふものあり。むさしの國ひしだといふところにてむまれければ、ひしだの源四と申けり。よりみつのつかいとして、一でう大みやにつかはしけるが、やいんにをよび、むまにのり、おそろしきよの中なればとて、ひげきりはかせらる。一でうほりかはのもどりばしにて、よはひ廿あまりの女ばうの、まことにきよげなるが、こうばいのうすぎぬのそでごめにほげきやうもち、かけをびして、まぼりかけ、たゞ一人ゆきけるが、つながうちすぐるを見て、夜ふけをそろしきに、をくり給ひなんやと、なつかしげにいひければ、つなむまよりとんでおり、しさいにやをよび候べきとて、いだひてむまにのせ、わがみもしづわにむずとのり、ほりかはのひがしをみなみへゆきけるに、女ばう申やう、わがすむところはみやこのほか、をくり給はんや。さん候とこたへければ、わがゆくところはあたごさんぞとて、つながもとゞりひつつかんで、いぬみをさしてとんでゆく。つなはちともさをがず、ひげきりをぬきあはせ、おにのてきるとおもへば、きたのゝやしろのくはいろのうへにぞおちにける。もとゞりにつきたるてをとりて見れば、女ばうのすがたにては、ゆきのはだへとおぼえしが、いろいろく、けかゞまりてこちゞみなり。これ

をぢさんしければ、よりみつおどろき給ひて、はりまなるせいめいをよびてとはれければ、つなは七日のいとま給はつて、にんわうぎやうをかうどくすべしとぞ申ける。だい六日になる夜、もんをたゝくものあり。たれととへば、つながやうば、わたなべよりのぼりたるこたふ。此やうばと申は、つながためにはおぼなり。人してはあしかりなるとて、つなたちよりていひけるは、七日のもののいみにて候へば、いづくにも一夜をやどをかり給ひて、みやう日いらせ給ふべしといへば、はゝ、さめぐゝとなき、むまれしよりあき風にもあてず、人だてしかひありて、よりみつの御うちに、ひしだげんじとだにいひつれば、かたをならぶるものなし。うれしきにつけても、こひしとのみおもへば、此ごろは一しほゆめ見心もとなくて、のぼりたるに、もんをさへひらかざりし、かゝるふけうのとがなれば、しんめいもまぼりたまはじ、七日のきせいよしなし。いまよりは、こともたのむべからず、おやとおもふなよと、かきくどきいひければ、つなはだうりにせめられて、たとひ身はいかになるともとて、もんをひらきていれてけり。こしかたゆくすゑの物がたりして、さても物いみとはなに事ぞとたづねければ、かくすべきことならねば、ありのまゝにかたる。はゝきゝて、さほどの事とはしらずして、うらみし事のくやしさを。され共おやはまぼりなれば、いよゝゝつゝがなるべし。さてそのおにてといふなるもの、世のものがたりに見ばやとぞのぞみける。つなは見せじとはおもへ共、さきのうらみが、きもにそみ、ふかくふうじたるおにのてをとりいだし、やうばにみせければ、これはわがてぞやとておそろしげなるおにゝなり、はふけやぶりにけり。それよりわたな

べたうは、いゑにはふをたてず。あづまやにつくるなり。ひげきりおにをきりてより、おに丸とかいみやうしけり。又よりみつそのころぎやへいわづらひ、なかばさめたるおりふしにそれよりへんげのものくだり、よりみつをつなにてまかんとす。まくらなるひざ丸ぬきあはせきるとおもはれしかば、ちこぼれて、きたのゝつかあなのうちへぞつなぎける。ほりて見れば、くもにてあり。しろがねのくしにさしてぞさらされける。それよりひざ丸をくもきりとぞ申ける。よりみつよりのち、みかはのかみよりつなにつたはる。天き五ねんに、よりみつのおとく、かはちのかみよりのぶのちやくし、いよのかみよりよし、あふしうのぢう人、くりやはの次郎、あべのさだたうきやうだいをせめんとせしとき、むつの守ににんぜらる。せんじにて、おに丸くもきりをよりつなげてよりよりよしにたびにけり。かのたちにて九年が間にせめしたがへ、さだたうをくびをきり、むねたうをばいけどりにし、のぼられけるが、たけ六しやく四寸なり。てん上人うちむれて、いざやおくのゑびすを見んとて、ゆかれけるに、一人むめの花をたおつて、やゝむねたう、これはなにとか見るととはれければ、とりあへず、

わがくにのむめの花とは見たれどもおほみや人はいかゞいふらん

と申ければ、てん上人しらせてぞかへられける。そのうち、つくしへながされ、いまのまつらたうとぞうけ給る。かくてよりよしより、ちやくし八まん太郎よしゑにつたはる。又あふしうを給はつてくだりしほどに、ではの國せんぶくかなざはのじやうにいゑひらたけひらどちこもりて、國をみだす。よいいへむかつて、三年にせめしたがへ、あはせて十二年のかつせんに、

(る)
てうてきほろびぬ事、二ツのつるぎのぬくはうなり。よしいゑのちやくし、つしまのかみ、ではの國にむほんのものありとて、いなばのまさもりをくだされ、かの國にてうたれしかば、四なん六でうのはうぐはんためよしにつたはる。十四にておちをうち、さこんのしやうげんににんぜらる。十八さいにて、なんとのしゆとのむほんをたひらげ、くりこ山のたうげよりをつかへし、あまざへ物のぐはぎなんどしけるも、つるぎのおとくとぞおぼえし。そのとき山ぼうしきゝてかくぞよみける。

ならぼうしくりこ山までしぶりきていがものゝぐをむきぞとらるゝ、
ならぼうしやすからざる事におもひけるところに、山ぼうし、あはの上ぎといふものにたばかられてきんごくせられたれば、これをくりこ山のへんたうにかくなん、

ひゑほうしあはの上ぎにはかられてきびしくろうにつがれおるかな

ためよしはんしやうにゑもんじうになる。三十九にてけんびいしになりて、むつのかみをのぞみ申されければ、よりよししいゑすねんたゝかひあり。かどであしければ、たこくを給はるべしとおほせくださる。せんぞの國給はらずして、なにかせんとて、つゐにじゆりやうせざりけり。あるときかのつるぎ、夜もすがらほうるこゑあり。おに丸はしゝのこゑなり。くもきりはじやのなくこゑなり。かゝりければおに丸をしゝのことあらため、くもきりをほえ丸とつけらる。ためよしおもひものあまたありければ、なんによ四十六人のこなり。くまのにありけるは、かつらはらの女ぼうとぞ申ける。そのはらにむすめあり。しらかはのぬんくまのさ

んけいありしとき、べつたうはと御たづねありければ、もとより候はずと申。いかにさる事あるべしとおほせいだされければ、おりふし花そなへてこもつたる山ぶしを、あんぜんなればとて、らいきたう、すゞきたうがをさへてなしにけり。きうしんべつたうこれなり。べつたうはぢうだいすべきものなれば、こなくてはかなふまじとて、さいあひをたづねしに、ためよしがかつらはらのむすめとぞきこえし。ためよしつたへきゝて、ゆくゑもしらぬしゆぎやうじやををさへてあはせられし事、くちをしき事にして、ふけうのごとし。かゝりけるところに、源平國をあらそふべきよし、をんごくまでもひろうあり。きうしん此ときよりきして、ふけうをもゆるさればやとおもひ、きやくそうあくそうら一まんよきにて、みやこにのぼりけり。ためよしきゝて、うちたねしやうはしらねども、かひぐしくゆゝしし。さもあれ、おぼつかなしとて、ねんごろにたづぬれば、さねかた中將のばつよう、けいづもくろくあざやかなれば、たいめんにをよむで、ほゑ丸をこそひきにけれ。きうしんべつたうこれを給はつて、したくにおさむべきにあらずとて、すなはちごんげんにこめたてまつる。むかしより二ツのつるぎなりしを、ひきはなち、心もとなくおぼえて、かちの上ずをめし、しゝのこをほんにしてつくられければ、こがらすとぞ申ける。すこしもちははずといへども、しゝのこに二ぶんばかりながかりけり。あるとき二ツのつるぎを、つかさやをとり、しやうじによせかけたてられけるが、からゝとたふれあひ、どううちして、こがらすがながさき二ぶんばかりうちきりて、おなじながさにぞなりにける。それよりしゝのこをともしりとはよばれけり。ためよし二ツのつるぎを

ちやくししもづけのかみよしとにもゆづられけり。さるほどにほうげんのみだれいでくる。だめよしふし七人、あんの御所へまいらる。よしともだいらへめされ、ほうげんぐはんねん七月十一日とらのこくよりたつのこくまで三ときのいくさに、しんぬんまけ給ふあひだ、ためよしとうごくへはたんこぶらいなればくだらす、天だいさんにてしゆつけして、ぎほうばうと申せしが、されどもこなれば見はなたじとて、ちやくしよしとをたのみゆかれけり。てうてきなればちからをよはず、よしともうけたまはつて、きられけるこそくちおしけれ。おなじくしやていためともばかりたすかりて、五人はきられぬ。はら／＼のこ四人ともにころさる。ためともはいづの國にながされ、つゐにうたれにけり。こんどのくはんしやうに、よしともさまのかみになされしが、やがてあくゑもんのかみのぶよりにかたらはれて、てうてきとなり、みやこをおちしとき、にしあふみひらといふところにて、八まん大ぼさつをうらみたてまつり、そぶよしゑは、大ぼさつの御ゑぼしごととして、八まん太郎とかうせしよりこのかた、ゆみやのみやうがにをひては、うたがひなしとおもひしに、たのむ木のもとにあめもりて、やみ／＼とまけぬるこそふしぎなれ。ことにつるぎのあとくまでをとりはてぬるくやしきよ。いまははなたせ給ふにこそとて、すこしまどろみけるに、あらたなるじげんあり。われはなつにあらず、つるぎのめをとるにあらず、つねになをあらためける事は、つるぎのみかるんずればなり。ことさうともきりのみやうせんじしやうは、みかたほろぶるにあひにたり。なをもつるぎのなを、むかしにかへさば、すゑはたのもしからんとて、ゆめははてにけり。よしともうちおどろき、すな

はちむかしのなにぞかへされける。うぶぎぬといふよろひに、ひげきりそへて、よりともにこそゆづられけれ。十二さい、いくさのにはよりして、かのたちよろひをちやくせしは、まつだいのしやうぐんと見なし給ふぞきどくなる。しほづのしやうじかもとに一しゆくし、ひがしあふみへみちしるべせられ、すゝかのせき、ふわのせきはふさがりぬ。うちてくだるときこえしかば、せつさんにわけいりぬ。あく源太よしひらはひだの國へおちゆきぬ。よりともはいとけなければ、大ゆきをわけかねて、山のくちにとまる。よしともはともながをめしぐして、みのゝ國あふはかのちやう(じや)がしゆく所へゆかれしが、ともながはいたでなれば、じかいしつ。おはりの國おさだのしやうじたゝむねをたのまれしに、おさだかひなくうちたてまつり、御くびにこがらすあひそへて、平家のげんざんにいりしより、こがらすは平家のつるぎとなりにけり。よりともは、せつさんをいでゝ、ひがしあふみ、くさのゝじうにやしなはれ、みだうの天じやうにかくされしが、おさなけれ共かしこくて、われはつみにはさがしいだされなん、つるぎを平家にとられじとおもひ、くさのゝじうをふかくたのみ、はゝかたのおほちなればとて、あつたの大ぐうしにあづけけり。きよもりのしやてい、みかはのかみよりもり、こんどのかはんしやうにおはりのかみになり、やへいびやう衛むねきよをくださる。よりともをさがしとつてのぼりければ、やがてむねきよにあづけらる。よりもりのはゝのにこう、しさいを申なだめ、いづの國ほうでうのひるがこじまへながされ、三十一と申、おしう四年のなつ一あんのせんじをかうふりて、むほんをおこされしとき、あつたのみやより申こひ、ひげきりをはき、

五き七だうをしたがへ給ふ。うしわかそのときたうざいなり。九ツのとしよりくらまへのぼり、とうくはうばうゑんにんがでし、かくゑんばうにがくもんし、しやなわうといひけるが、十六と申、じうあん四年のはる、五でうのはしのへんなるすゑはるといふあきんどゝあづまへくだり、みちにてみづからげんぶくして、源九郎よしつねとなのり、ごん太郎ひでひらをたのみしが、しやきやうのよりきとしてのぼるほどに、あいざはにてゆきあひけり。木そをちうりくし、つの國一のたにへむかはんとす。こゝにくま(の)ゝきうしんがこに、たなべのたんそう、源氏ははゝかたなればとて、ためよしのてよりわたされしひざ丸をひきて、げんざんにこそいりにけれ。くまのよりはるの山をいでたればとて、なをばうすみどりとあらためらる。さんやうさんいんなんかいさいかい、源氏につくも、しかしながらつるぎのみとくとぞおぼえし。よしつねかまくらへくだらんとせしとき、かぢはらがざんげんによつて、かへりのぼられけるに、つるぎをはこねにこめられけり。げんきう四年五月廿八日の夜そがきやうだいが夜うちるとき、はこねのべつたうきやうじつがてより、ひやうごくさりのたちを五郎にえしは、此うすみどりなり。さればなをこうだいにあげしとかや。そのときかまくらにめされ、ひげきり、ひざ丸一具にして、つゐにまいりあひければ、まことは源氏のちうだいときどくふしぎのつるぎなり。

かみよより三ツのかゞみあり。ないしどこと申たてまつるは、その一ツなり。むかし天しう大じんあまのいはとをとおて、天がくらやみとなさせましませしとき、よろづのかみたちあつまりて、こはいかゞすべきとはかりごとをおもひまふけ、さかきの御しでをさゝげ、みかぐらをそうし給ひしかば、天しう大じんいはとをほそめにひらかせ給ひて、御らんぜられしとき、よの中すこしあけになりて、あつまらせ給ひけるかみぐの御かほしろぐとして見えければ、いはとのうちよりおもしろしとの給ひける。おもしろといふことばそれよりしてぞはじまりける。天しう大神いはとより御めをすこしいださせ給ふを、あつまられけるかみたちの、あなめでたやといさまれければ、それよりこそよろこびのことばを、めでたしとは申なれ。そのときたちからのおみことといふ大ちからのかみありしが、^(ゑ)ひごゑをあげて、いはとをひきひらき、とびらをひきちぎつて、こくうへとをくなげられけるほどに、しなのゝ國におちつきぬ。とがくしのみやうじんこれなり。それよりこのかた、日月しやうしゆくてり給へば、天しう大神と申たてまつる。いはとをひきやぶられて、大神あらはれ給へば、ちはやぶるかみと申なり。そのゝちよしあれば、又いろゝのもんじかきかゆるなり。かくて天しう大神いはとにすませましませしとき、わがしそんわれを見まほしくおもはんときは、此かゞみを見よとて、かみたちにおほせて、あまのかぐ山よりあらがねをとり給ひけれども、くもりてあしかりければ、すゑのよにはいかゞとて、すて給ひぬ。いまきいの國日ぜんさうと申ところなり。つぎにい給へるは、しやうを一ツにして御かたちをありゝというつされければ、ないしとなづけて、御この

まぎやわれかつくはやひあまのおしほにのみことにゆづり給ひけり。神といへばかゞみなり。かみはにこれるをきらふゆへに、がのじを中りやくして、かゞみをかみとは申たてまつるなり。御このみこと、こひしくおぼしめされしときは、大神の御かたちよとて見給へば、なきあとのしるしをいまかたみとは申なり。それよりしだいにつたはつてにんわうのみよにをよび、九だいのみかど、かくくは^(い)天わうの御うまでは、みかどもないしどころも、一うのでんにまし／＼けるが、だい十だいのみかど、しゅじん天わうの御とき、れいゐにをそれて、べちでんにうつしたてまつらる。それよりしてこそないしどころ、うんめいでんへはうつらせ給ひけれ。せんとせんかうのゝち、百六十年ありて、むらかみの天わうの御とき、天とく四年九月廿二日のねのこく、だいのなかのへんよりひいでくる。ひもとはさゑもんがぢんにて、ないしどころのおはしますうんめいでんちかゝりけり。しづかなるやはんの事なりければ、ないしもによくはんもまいりあはずして、ないしどころをいだしたてまつるべき人もなし。をのゝみやどの、いそぎまいり見給ふに、ないしどころのわたらせ給ふなるうんめいでんすでにやけさせ給ぬぬ。^(マ、)いまはよはかうこそとて、御なみだにむせばせ給へば、ないしどころはうんめいでんのからびつよりとびいでさせまし／＼て、なんでんのさくらの木にかゝらせ給ひけり。くはうみやうかくやくとして、あさ日の山のはよりいづるにことならず。そのとき、をのゝみやどの、よはつきざりけりとて、よろこびのなみだせきあへず、みぎのひざをつき、ひだりのそでをひろげさせ給ひて、むかし天しう大神百わうをまばり給はんとの御ちかひましますなり。その御

ちかひいまだあらたまらずんば、しんきやうさねもりがそでにやどらせ給へと申させ給へば、そのことばのすゑいまだはてざるに、ないしどころはさくらのかずゑより、御そでにとびうつらせ給ひける。やがて御そでにつゝみたてまつり、しゆじやうのまします大じやうくはんのてうしよへわたしたてまつり給ひけり。此だいはうけたてまつるべきしんかもたれかおはすべき。ないしどころやどらせ給ふまじ。おもへばしやうこそそめでたけれ。さればにやながどの國だんのうらにて、ゑびすどもとりたてまつらんとからうとのじやうをねぢきつて、御ふたひらかんとしければ、たちまちめくれはなぢたる。平大なごんときたゞのきやう、あなあさまし。それはないしどころと申て、かみにてわたらせ給ふ。ぼんぶはかゝらはぬ事をとの給へば、みなをそでそでにける。同げんりやく二年三月廿五日とば殿につかせ給ふ。その夜のねのこくに大じやうくはんのてうしよへいらせ給ふ。同廿八日のねのこくに、うんめいでんにいらせ給ふ。ぎやうがうなつて、三が夜りんじの御かぐらあり。ちやうきうぐはんねん、ゑいりやくぐはんねん四月のれいとぞきこえし。さこんのしやうげんおうのよしかた、べつちよくをうけ給はり、いへにつたはりたるゆたちのみや人、かぐらのひきよくをつかまつり、ゆうにちうちうにぞきこえし。此うたはよしかたがそぶ、八でうのはうぐはんすけたゞがほかはしれるものなし。すけたゞあまりにひして、しそくちかかたにもつたへずして、ほりかはの天わう御ざい（ゐ）のとき、さづけたてまつりてしゝてげり。さてこそないし所の御かぐらのありしときは、しゆじやうみすのうちにましゝて、ひやうしをとらせ給ひつゝ、ちかかたにをしえ

させ給ひけり。まことにちゝにならひたらんはよのつねなり。いやしき身として、かゝるめいぼくをほどこしけるこそめでたけれ。みちをたやさじとおぼしめされたるきみの御心ざしのかたじけなさに、みな人かんるいをぞながしける。いま一ツのかゞみと申は、そさのおのみことのいなたひめのところよりえて、むらくものつるぎと一つに天しう大神へまいらせ給ふ。いまはきいの國ふたみのうらにあるとかや。ことにいはのおくにいしにそふてありければ、みちしほには見え給はず。しほひのときはあらはれ給ふ。さればかいしやうおだやかなるときは、をしわたり、せんだちをまふけてはいしたてまつるとぞうけ給る。かゞみをばいはのあひだにおさめたればこそ、ふたみのうらとは申けれ。又しんじと申は、だい六天のまわうのをしてのはんなり。いかなるしさいにて、てんわうの御たからとはなるぞと申に、だい六天とはたけじざい天なり。まわうすなはち六よく天のぬしなり。日ほんはじめていできしかば、わがよくかいとさだめしところを、天しう大神りやうじ給ふ。かみといひほとけといひ、一ちのたいよう、つゐにはぶつぼうるふすべし。ゆるすべからずとて、三十一まん五さいまで、まかいとおなじ。しかるを天しう大神はうべんをもつての給ひけるは、此國をゆづり給はゞ、われもまわうのけんぞくなりとて、てしるしをいだし給ふに、三ぼうを見べからずとぞちかひある。さてはうたがひなしとて、をしてのはんをたてまつる。此はんあらんがきりは、しんぜんにをひて、まゑんのしやうげあるまじと、かたくちかひわたしたてまつる。さればいまにいたるまで、しんめいのかごつよければ、あくまもをそれけるとかや。かみは正ちきなれば、御やくそくをち

がひ給はず、かれがかゝみるところなればとて、でんぜんにしゆつけをじたいし給へり。

平家ほろびてのち、くにくもしづまりて、人のかよひもわづらひなし。されば九郎はうぐはんほどの人こそなかりけれ。かまくら源二の殿はなに事もしいだし給はず。かうみやうあるはたゞはうぐはんのよにてあるべしと、ないく申ときこえしかば、かまくら殿、これをきゝつたへ給ひて、こはいかによりともがぬながらはかりごとをめぐらせばこそ、平家はほろびぬれ。九郎ばかりしてはいかでかよをおさむべき。人のいふにおごりて、いつしかよをばわがまゝにしたるにこそ。さばかんのてうてき、平大なごんがむこになる事しかるべからず。又世にもはゞからず大なごんがむこにとるも心急ず。さだめてこんどくだりては、九郎はくはぶんのふるまひをぞせんずらんと、心よからずおもはれける。

(ふくしよう)

そのころ九郎はうぐはんおほいどのゝふしをぐして、くはんどうへくだらゝるときこえしかば、おほいどの、はうぐはんのもとへの給ひつかはされけるば、このほどまことやあづまへくだるべしとうけ給る。さてはいけどりのうちに、八さいのわらはとしるしたるはいまだ此世に候やらん。くはんどうへくだらぬさきに一ど見候はゞやとの給へば、やすき御事に候とぞいはれける。二人のねうぼう、わかぎみをなかにをきたてまつり、いかなる御ありさまに見まいらせんずらんとて、あさなゆふななくよりほかの事ぞなき。はうぐはんかはこえのこ太郎がもとへ

いひやられければ、かはごえ人のうしくるまをかつて、わかぎみ女ばうともにのせたてまつり、おほいどの、御かたへいれまいらす。わかぎみはるかにちゝを見たてまつり給はで、よにも心よげにおはしけり。おほいどの、いかにふくしやう。これへとの給へば、やがて御そばにより給ふ。わかぎみをひざにかきのせ、かみかきなで、しゆごのぶしどもにむかつての給ひけるは、これ見給へ、とのばら、これがはゝは、これをうむとて、なんざんをしてしにぬ。さんはたいらかにしたりしかども、うちふしてなやみしかば、われはこんどはなくなりぬとおぼゆるなり。いかなる人のほらにわかぎみまうけ給ふとも、これをそだてゝわらはがかたみに御らんぜよ。めのとなんどのもとへさしはなちやり給ふべからずと、あまりにいひしがむざんさに、天がにこといでこんときは、あのきよむねは大しやうぐんにて、これはふくしやうぐんをせさせんずればとて、これがなをばやがてふくしやうといはんといひしかば、なのめならずよるこんで、なをよびなんどしてあひせしが、七日といふにつめにはなくなりしぞとよ。見るたびにその事がわすられとてなき給へば、しゆごのぶしもなみだをながす。ゑもんのかみもなけれけり。二人の女ばう共もそでをぞしぼりける。すでに日もやうゝくれゆけば、おほい殿、さらばふくしやううれしく見つ、とくゝかへれとの給へば、おほひどのにひしゝととりつゐて、いさやかへらじとぞなけれける。ゑもんのかみたちて、こよひはこれに見ぐるしき事のあらんずるぞ。とくゝかへりて又みやう日まいるべしとの給へば、^(共)なをもたち給はず。二人のねうばうどもよりて、すゝめいだきたてまつり、くるまにぞのせまいらす。おほいどの、

わかぎみのうしろをはるかに見をくり給ひて、ひみつのおもひなげきはことのかずならずとぞなけれける。はゝ御ぜんのゆいごんのいとをしければとて、つみにさしはなちてめのものもとへもつかはさず、わが御まへにてそだてたてまつり給ひけり。三ざいのとし、かぶり給り、うめかぶりして、なのりをよしむねとぞ申ける。をひたち給ふまゝ、見めかたちつくしくして、心ざまさへゆうにおはせしかば、おほいどのなのめならずいとをしき事にし給ひて、さいかいのたびのそらまで、つめにかたときもはなれ給はぬところに、いくさやぶれてのち、四十よ日になりぬるに、けふぞはじめて見給ひける。五月七日のうのこくに、はうぐはん、おほいどのふしぐしたてまつり、すでにくはんとうへぞくだり給ふ。六日の夜、かはごえのこ太郎はうぐはんにまいりて申けるは、さてあのわかぎみをばなにとしたてまつり候べき。はうぐはん、たうじあつきなかにおさなきものひきぐして、くはんとうまでくだるにをよばず、これにてよきやうにはからへとの給へば、さてはうしなふべき人よと心ゑて、わかぎみはめのどの女ばうといね給へり。そのよしんかうにをよんで、かはごえのこ太郎、ねうばうどもに申けるは、おほひどのすでにくはんとうへ御くだり候。しげふさもはうぐはんの御ともにくだり候へば、わかぎみを、をがたの三郎がもとへいれまいらすべきにて候。御くるまよせて、とく／＼と申せば、ねうばうども、まことぞと心ゑて、ねいり給へるわかぎみをおどろかしたてまつり、いぎ／＼せ給へ、御むかひにくるまの候と申せば、わかぎみおどろかされて、きのふのやうにおほいどのゝ御かたへ又まいらんずるかどよろこび給ふぞいとおしき。わか君のせたてまつりて、六でう

をひがしへやる。かはらにくるまをやりとゞめ、しきがはしきて、わかぎみをおろしたてまつる。二人の女ばうたち、ひごろよりおもひまうけたる事なれども、さしあたつてはかなしかりけり。人のきくをもはゞからず、こゑもおしますおめきさけびけり。わかぎみはあきれ給へるやうにて、二人の女はうどもなくを見て、おほいどのはいづくにわたらせ給ふぞとの給へば、ぶしどもよりて、たゞいまこれへいらせ給はんずるに、おりてまぢまいらせ給へとて、しきがはのうへにいただきおろしたてまつる。かはこゑがらうどうたちをぬきよりければ、たちかけを見給ひて、なくをおどすとやおもはれけん、いなやなかじとて、めのとがふところへかほさし入れてなけれけり。かはこゑをそしとめを見あはせければ、たちにてかなはじとて、かたなをぬき、めのとがふところにかほさし入れ給へるわかぎみを、ひきはなちたてまつり、つゐに御くびとつてけり。くびをばはうぐはんに見せたてまつらんとてもちてゆく。むくろはむなしにかはらへすてにけり。二人の女ばうども、かちはだしにて、はうぐはんの御まへにゆきて、なにかくるしふ候べき。あのわかぎみの御くび給はつて、ごせとぶらひたてまつらばやと申せば、はうぐはん、もつともさるべしとてぞゆるされける。二人のにうばうたち、わかぎみの御くびをえて、めのと女ばうのふところにいれ、二人つれて、なく／＼かへるとぞ見えし。そのうち五六日ありて、女ばう二人、かつらがはに身をなげたる事あり。一人の女ばうはおさなきものゝくびをふところにいれて、しづみたりしは、わかぎみのめとなりけり。めのとがなげしはことなりなり。かいしやくの女ばうさへ身をなげけるこそありがたけれ。